

清末小説から 129

2018. 4. 1

- いくたびかの阿英目録19………樽本照雄 1
田漢漢訳『ハムレット』の底本1………荒井由美 4
『瑞士建国誌』について——漢訳「スイス独立史」………沢本香子10
李伯元死後のこと(下)——『繡像小説』発行遅延との関係………樽本照雄23
『比律賓志士独立伝』の底本2………沢本郁馬37
文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告………神田一三41
清末小説から10、36、45

★田漢漢訳については分載の予定です。誌面のつごうで3回か4回になるかもしれません。ご留意

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜8番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録19

樽本照雄

「老残遊記」原稿第11回が没書に

劉鉄雲は、帰宅してから夜に「老残遊記」の原稿を数枚書いた。翌朝、家庭教師の汪劍農に渡して清書させる。下書き原稿は、自然と手元に残る(ここは重要)。清書原稿は、連夢青宅に送られた。連を経由して『繡像小説』編集部に届くという手順だ。劉鉄雲の息子大紳が、そう証言している*62。

こうして、「老残遊記」は、該誌第9期(癸卯八月初一日1903.9.21)から連載がはじまった。劉鉄雲は、刊行された『繡像小説』を入手して自作を読みなおしたともいう。この時、自分の作品部分だけを抜き出して保存した。

順調に回数を重ねて該誌第16期(刊年不記。実際の刊年は推定甲辰1904年四月)になったとき、事件が発生する。

14回までの原稿が編集部には渡してあった。連夢青が刊行された『繡像小説』を見て奇妙なことを発見する。原稿第11回が没書になっている。話のつじつまを合わせるために第10回の末尾、第12回の冒頭に削除がある。原稿第12回が雑誌掲載では第11回だ。連は怒る。没書の理由を問うと、商務(印書館、と劉大紳は記す。また、李伯元、歐陽鉅源の名前には触れない)は迷信を打破しようとしているが、作品が物の怪を書き込んでいる(語怪)ためだ。そういう回答だった

もうひとつ改竄の例がある、とこれも劉大紳が指摘する。原稿第8回に山中で狐に出会う。商務が勝手に狐を虎に変更した。

劉大紳のいう「商務」は、いうまでもなく商務印書館である。『繡像小説』の発行元だ。雑誌の編集は李伯元にまかされていた。彼は協力者の欧陽鉅源と編集をしながら、上述のようにふたりともが個別に作品を連載している。連夢青が直接相手にしているのは、組織としての商務印書館ではない。具体的には主編の李伯元とその協力者である欧陽鉅源のはずだ。劉大紳は、そのこの区別をつけていない。彼にしてみれば、どちらでも同じことだった。

原稿に書かれていたのは山中の狐だったというのは、どうか。これは奇妙だ。理由はふたつある。

1 劉鉄雲は、のちに『天津日日新聞』社長方葯雨の勧めで「老残遊記」を最初から連載しなおした。他人によって狐が虎に書き換えられたのであれば、『天津日日新聞』ではもとの狐に訂正するだろう。だが、虎のままだ。

2 「老残遊記」第8回が『繡像小説』に掲載されたとき、なぜ反発しなかったのか。原稿とは違う、と抗議したとは書かれていない。

以上の理由をもって、狐については、劉大紳の勘違いだと考える。

原稿を取り次ぐ連夢青が、編集者と決裂してしまった。劉鉄雲は、自然に執筆を停止するかたちになる。ただし、渡してあった原稿がそれ以後も掲載された。それをやめさせることはできなかった。原稿は買い取りだったのだろう。どのみち原稿料は連夢青が受け取るようになっていた。

1回分ずれていって第13回(原稿第14回。ここが重要)が『繡像小説』第18期にのった。中断してそのまま終了する。読者は、裏の事情を知らない。「老残遊記」は未完成作品だと長く考えられていた。のちに、雑誌掲載分と単行本の内容が異なることに気づく読者がごくまれにいた(後述)。

劉大紳が「關於老残遊記」において没書事件の内情を暴露したのが1939年だ。光緒三十

(1904)年五月頃に連載が中断した。そこから数えれば35年間も事情不明のままだった。

原稿第11回は、なぜ没書になったのか。物の怪を書き込んだのが理由だという説明だった。義和団事件を背景にして北方に義和拳、南方に革命党(北拳南革)の存在とその活動を描いて批判しているのが物の怪か。北拳南革の実状を八卦に拠りながら占い風に解説して見せる。これが該当するのだろうか。

この段階では、原稿没書事件にとどまっている。劉鉄雲父子も、また関係者もそれ以外のことは書いていない。盗用事件は、この時点でまったく姿を見せていないのだ。それも当然だといえる。なにしろ、時間的に隔たる。ずっとのちの光緒三十二(1906)年閏四月に盗用が発生する。没書になった「老残遊記」第11回原稿から、「文明小史」が盗用する。それは、二年も未来の話だ。また、盗用事件が発生したあとも、劉鉄雲、大紳父子は、その事実を知らないままだった。劉鉄雲は、運塩会社の仕事で中国東北部を動き回っている。上海の小説専門誌でなにおこっているのか関心もなかっただろう。劉大紳が盗用事件に言及していないところからそれが理解できる。

21世紀になってのことだ。私は劉徳隆の劉鉄雲関係著作に盗用事件が書き込まれていないことを本人に指摘したことがある。劉徳隆は気がつかなかった、次の著作には言及するという返事だった。彼は劉大紳の証言を基本に使用しているようだ。ゆえに書かれていない盗用事件には注意が向かなかっらしい。

「老残遊記」原稿第11回執筆の謎——阿英の呪縛

「老残遊記」は、その後どうなったか(以下は、主として劉大紳の説明に拠っている。私の考えも挿入しているので注意)。

『繡像小説』での連載は、中断して終わった。劉鉄雲は、「老残遊記」の執筆を放置していた。もとは連夢青を経済的に援助するために執筆を

始めたものだ(劉大紳証言)。肝心の連夢青が『繡像小説』編集者の没書行為に対して立腹した。彼の「鄰女語」は、第12回(該誌第20期)で掲載を同様に中止する。劉鉄雲が原稿を継続執筆する理由は、消失している。

劉鉄雲の友人方葯雨は、そのころ『天津日日新聞』の社長だった。方葯雨は、小説中断のいきさつを鉄雲から直接に聞く。未完のままでは惜しい、と続作を勧めた。劉鉄雲は承諾する。

こうして「老残遊記」は、第1回よりあらためて『天津日日新聞』に連載されることになった。

「老残遊記」の原稿第14回までは『繡像小説』に掲載されている。劉鉄雲はその掲載分を所持していた。新聞連載にあたり、それを底本にすることができる。ただし、第11回は没書になっている。『繡像小説』には載らなかった。あらためて書く必要がある。といっても、残してあった下書き原稿が役立つ。これをもとにして復元する。あとは第15回から第20回までをあらたに書き下ろす。これが初集20回である。

その新聞掲載時期は、いつか。

ここでも阿英が登場する。

重要な局面に、彼は必ずといっていいくらい発言している。研究の先頭を切っていた証拠のひとつだ。学界の権威である阿英の説明だから、研究者が重視するのは当然だろう。私は、非難しているのではない。以下において、彼の研究における功績は大きい、誤ることもあるといたいのだ。

『繡像小説』終刊を李伯元の死去と結びつけ、丙午(1906)三月十五日だと断言したのは阿英だった。彼の記述が誤りであることを証明するためには、多くの資料と長い時間が必要だった。いまでも阿英説を大事に守って思考が停止している研究者はいくらでもいる。老若男女、国の内外にかかわりない。

「老残遊記」の『天津日日新聞』連載についても、阿英は書いている。前述のように彼は

『天津日日新聞』切り抜き本を所蔵していた。その彼が、簡潔に説明してくだ。

掲載時期、在商務輟刊之翌年、即甲辰(一九〇四年)^{*63}。

商務、つまり『繡像小説』で中断した翌1904年だ、と言い切っている。注釈はない。疑問符もつけない。阿英は、この見方を変えることは終生なかった。

《老残遊記》初発表於《繡像小説》(一九〇三)，至十三期中断。翌年在天津《日日新聞》重新發表，至二十回，刊成単本初集。230頁^{*64}

ここを読めば、1904年新聞掲載が事実だと信じざるをえないだろう。なにしろ疑問を持つともそれに対立する異なった資料はないのだ。

新聞の実物があれば問題を解決できる。私は、1984年に『天津日日新聞』を天津でさがしたことがある。天津図書館、南開大学図書館(閲覧室でバッグを盗まれた)、天津晩報社までたずねた。どこにも収蔵されていなかった。ただ、『老残遊記』初集20回初版(天津・孟晋書社発行 天津日日新聞社印刷 刊年不記)は、天津図書館で見つけた。前述のとおり、刊年不記である。

『繡像小説』の定期発行説は、阿英が提出して広めたようなものだ。研究者の誰もが彼を支持しそう信じ込んだ。例外は残念ながら、ない。これがもとなっている。

該誌は定期刊行を守っていた。阿英による推測であるにすぎない。だが、いつのまにか動かぬ事実になった。ならば、連載を中断した第18期は、癸卯(1903年)十二月に刊行されたはずである。『天津日日新聞』連載は、その翌年だから甲辰(1904年)で間違いはない。くりかえすが、「老残遊記」の『天津日日新聞』切り抜

き本を所有するのが阿英だ。彼の記述は信頼性が高いと思わせる根拠のひとつになっている。阿英のことだから新聞の実物を見て確認しているだろう。ほかの研究者は、そう考える。

阿英の説明には、スキがない。ぴたりとつじつまがあう。だからこそ異議をとなえる専門家はいなかった。1904年に新聞連載した。これが定説となり、研究者が問題を考察するさいのよるべき出発点となったのはいうまでもない。

新聞連載は1904年だったという指摘そのものが、まさか間違っているとは、だれも想像すらしなかった。その中には、劉鉄雲の孫である兄蕙孫(福州在住)と弟厚沢(上海在住)も含まれる。

四

【注】

- 62) 劉大紳「關於老殘遊記」(署名は紳)『文苑』第1輯 1939. 4. 15。のち『宇宙風乙刊』第20-24期1940. 1. 15-5. 1に再掲載。また、魏紹昌編『老殘遊記資料』北京・中華書局1962. 4(采華書林影印もある)、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老殘遊記資料』成都・四川人民出版社1985. 7などに収録される。
- 63) 阿英「老殘遊記版本考」は「關於老殘遊記二題」所収『小説二談』。61頁
- 64) 阿英「關於《老殘遊記》——《晚清小説》改稿的一節」『文学評論』第4期 1962. 8. 14/『小説三談』上海古籍出版社1979. 8/劉徳隆・朱禧・劉徳平編『劉鶚及老殘遊記資料』四川人民出版社1985. 7

田漢漢訳『ハムレット』の底本1

荒井由美

田漢漢訳『ハムレット』がある。漢訳シェイクスピア戯曲のひとつだ(本稿では以下、基本的にシェイクスピアを莎氏、シェイクスピア戯曲を莎劇と称する。引用は除く)。中国で最初に戯曲の形式をもって翻訳された。小説型式ではないことが重要だ。この点が特別に強調される。

それを力説するのはそれなりの背景がある。ラム姉弟『シェイクスピア物語』を漢訳した漢訳者不詳『滌外奇譚』(1903)あるいは林訳『英国詩人吟辺燕語』(1904)を念頭に置いているからだろう。前者には「第十章 報大仇韓利徳殺叔」で、後者には「鬼詔」(ハムレットは漢姆来徳)と題して収録される。または文明戯「ハムレット [竊国賊]」(1916)も視野に入れている。

中国学界では林訳『吟辺燕語』を低く評価する傾向が顕著にある。林紓自身に対する認定は少し改善されたとはいえる。だが、『吟辺燕語』の評価が低いことは変わらない。ラム本がもとは児童向けの書物だというのがその理由のひとつかもしれない。もともと小説化した著作だ。しかし、劉半農らはそこは無視した。林紓は莎劇を勝手に小説化してけしからん、と五四直前から非難を続けてきたのが事実である。中国学界では戯曲と小説の区別がつかないのだろうか。

評価が低いのは、過去においてその林紓批判が激しく展開された影響を被っているだろう。それにしても林訳『吟辺燕語』にもとづいて創作した文明戯「竊国賊」は批判しない。評価の姿勢が一貫していない。奇妙なことだ。文芸とは別に袁世凱批判という政治判断があるものと思う。現在の中国学界では文芸と政治は切り離すことができない。

戯曲を翻訳した田漢漢訳に対して高い評価をあたえるのはよい。しかし、研究の不足している部分があることにも触れるべきだ。

田漢の漢訳『ハムレット』は、1921年に一部分が雑誌に先行掲載された。全訳の単行本が刊行されたのは翌1922年である。

日本において戸沢姑射による最初の全訳出版が1905年だ。それと比較すれば17年の時間差が生じている。ちなみに坪内逍遙の全訳は1909年のこと。いずれも田漢漢訳よりもはるかに早い。

当たり前のことを書いておく。翻訳研究において底本を特定することは基本かつ出発点である。田漢漢訳について底本特定は、すでに行なわれていると思っていた。なにしろ田漢漢訳の雑誌初出が1921年だ。ほぼ1世紀近い時間が経過している。ところが、いくつかの先行論文を読んでも底本について説明したものがない。坪内逍遙の日本語翻訳に言及する論文はある(後述)。だが田漢が莎劇を漢訳するにあたって英文原書のどういう版本を使用したのか述べてない。重大問題であるにもかかわらずその解説がない。

くり返す。田漢漢訳『ハムレット』は、中国で最初に戯曲の形式をもって翻訳された。常識的に考えて莎劇の英文原本を見ないで漢訳はできないだろう。それとも、田漢は莎劇そのものではなく坪内日訳だけに依拠したというのか。にわかには信じがたい。そこが不明なままだ。

奇妙に感じる。底本を特定できないのに田漢漢訳と比較対照するのだろうか。それは研究として有効なのかという疑問につながる。簡単にいえば、ただそこにあるというだけで来歴の不

明な原文を莎劇そのものとして利用している。底本について検討もしないのは研究の手続き上あってはならない。

これでは底本の探究をせずにイソップ、アラビアン・ナイトの漢訳を論じているのと状況はかわらない。多くの異版が存在するにもかかわらず、底本を不明のままにして漢訳の質を問うのは不毛なことだ。立論それ自体が成立しない。それが理解できないようだ。珍しく底本を明示していると思えば先行論文の無断借用だったことがある。ここは宋声泉を指す。実名を出さなければ事の重大さを理解しないからだ。

林紓らは莎劇を小説体になおして漢訳した。中国学界がそう批判し続けたのは周知の事実だ。小説化した底本があることを知らない。そこから生じた深刻な間違い。文学史上まれに見る冤罪事件だと私はいつている。それを不思議だと思わないのが不思議なところ。底本の特定が研究の出発点であるという認識がないらしい。研究よりも政治を優先させた結果なのだ。

本稿の目的のひとつは、田漢漢訳『ハムレット』の底本を特定することである。

底本が判明していないという事実から出発している。どこまでが明らかになっており、どこからが不明なのかを確認する必要がある。必要だから過去の研究を一部おさらいすることになった。その結果、あれがない、これもない、と否定的な表現が自然に多くなるという現象が生じた。書きながら自分でもいかなるものかとは思っている。だが、本当のことだからしかたがない。気になる人は最後の結論だけをお読みください。

まず、田漢の漢訳題名が混乱していることから始める。田漢自身が引き起こした矛盾だ。

田漢は日本に留学していたとき『ハムレット』の漢訳に取り組んだ。漢訳『ハムレット』の冒頭部分を公開した時に題名と本文の1字が異なってしまった。不統一である。一見小さな部分異同にすぎない。しかし、私がわざわざ書くのは、この事実を説明する論文を見ないから

だ。

ハムレットとハムレット (傍点は筆者。以下同じ)

田漢漢訳『ハムレット』の訳語表記はふたつある。雑誌初出に「ハムレット」と「ハムレット」が混在する。

「ハム」と「ト」の1字が異なる。無気音と有気音の違いだ。両者ともに日本語にすればハムレットではある。英語原音に近いのは、無気音の「ハム」である。ちなみに前述の『海外奇譚』では「韓利徳」だ。また、林訳『吟辺燕語』は「漢姆来徳」とする。いずれも「ハム」を当てている。

田漢はのちに漢字の不一致に気づいたのか、単行本では『ハムレット』に統一した。

漢字表記が2種類あることにご注目いただきたい。そういうのには理由がある。雑誌掲載時の「ハムレット」を普通の文献は出さない。無視する論文がほとんどだからだ。

確認するためにあらためて書いておく。雑誌発表の詳細は以下のとおり。

1 雑誌初出

莎士比亞原著、田漢初訳「ハムレット」第1幕 第1-3場*1 『少年中国』第2巻第12期1921. 6. 15 / 影印本 「訳叙」「代序」あり

目次では「ハムレット (劇本)」と表示する。本文の題名も「ハムレット」だ。

目録作成のばあい、本文題名と目次の表記が異なる時(よくある)は本文を優先して採用する。これが原則である。

田漢漢訳は、本文題名と目次は同じ「ハムレット」だ。ゆえに採用するのは「ハムレット」でよい。

奇妙というか事態を複雑にしているのは、本文中に登場するのが「ハムレット」であり柱も同様の綴りにしているからだ。ただし、本文にも「ハムレット」とする箇所がある(42頁)。それは単行本では「ト」に訂正された(5頁)。つまり混在というわけだ。「ハム」と「ト」の1字違いの矛盾を無視するのはよくない。

私が見た研究論文は、多くが雑誌初出と後の単行本の題名を区別しない。2種類の表記があることを知っているのかどうかは不明だ。手元にあるいくつかを紹介しよう。

専門資料のひとつ『田漢専集』(1984)*2からその箇所を引用する。

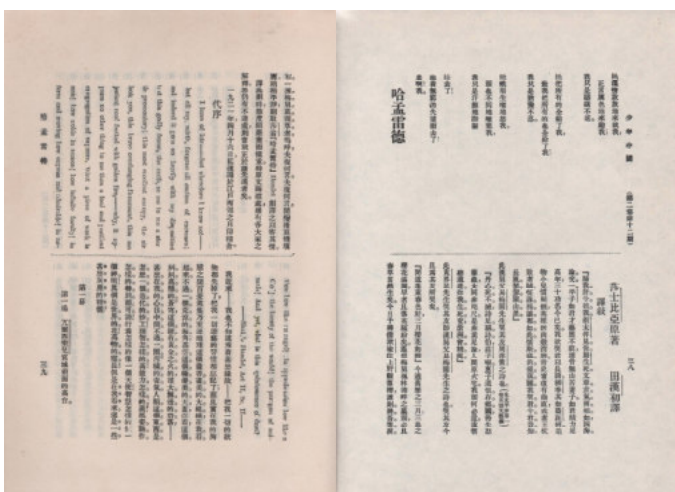
一九二一年

ハムレット 莎士比亞著 田漢訳 / 《少年中国》第2巻第12期; 単行本, 中華書局1922年出版。681頁

『少年中国』の巻期は明記する。だが1921年の項目に収録するだけで月日を記述しない。中国の一般書籍では普通のことだ。しかし、専門資料なのだから記載のあるままに月日を記録するのが望ましい。

それよりも重要なことがある。最初から題名そのものが間違っているのはどういうことだろうか。現在一般に使用している「ハムレット」にするのは正しくない。これを見る読者は初出と単行本の題名がそうなっていると誤解するだろう。前述のように初出は「ハムレット」が正しい。「本文中ではハムレットとする」くらいの注釈を

これには説明が必要だ。『少年中国』の該号



つけるのが当然だ。また単行本の題名も示すべきだろう。それが無い。

小谷一郎、劉平編『田漢在日本』(1997)^{*3}収録の年表に出てくる。単行本についても引用する。

1921年(民国10 大正10) 23歳
4月16日 訳完莎士比亞劇作《哈孟雷特[德]》。発表時又写《訳叙》。(《少年中国》第2巻第12期) 441頁

1922年(民国11 大正11) 24歳
11月 訳著《哈孟雷特》一書由中華書局出版。為《少年中国学会叢書》之一。445頁

『少年中国』初出の漢訳題名が間違っている。「訳叙」のほかに「代序」があることを書かない。「4月16日」は翻訳完成の日付である。『少年中国』の刊年とは違うことにご注意を。

小さなことに思えるだろう。しかし重要などころだ。なぜなら、雑誌で確認したか否かが問われるからだ。記述内容の信頼性が問題になる。事実は細部に露出する。その認識がないと思われる。

記述の不足をすべての文献について検討しているわけではない。専門書の例を出した。ごく基本的なところで孟憲強『中国莎学簡史』(1994)^{*4}を紹介しておく。わかりやすいから巻末の「中国莎学年表」から関係部分を引用する。

1921年
田漢訳《哈孟雷特》在《少年中国》第2巻第12期発表、此為中国第一次用劇本形式的白話翻譯的莎士比亞卷之作。459頁

1922年
冬、田漢訳的《哈孟雷特》由中華書局以“莎翁傑作集”第一種為名出版。459頁

ほかの説明とほぼ同じだ。これ以後、だいたい

の論文は戈宝権「莎士比亞作品在中国」(1983)^{*5}あるいは孟憲強によって記述しているらしい。

たとえば、李長林、楊俊明「莎士比亞作品在中国的傳播」(1999)^{*6}がある。田漢漢訳を説明して次のとおり。「後來他訳的《哈孟雷特》在《少年中国》第2巻第12期(1921年)発表、此為中国第一次用劇本形式的白話翻譯莎士比亞的劇作」(91頁)。これはほとんど孟憲強の文章とかわらない。

あるいは次の著作がある。李偉昉『梁実秋莎評研究』(2011)^{*7}から関連部分の一部を引用する。

(1921年) 田漢在《少年中国》雜誌第2巻12期上發表訳作《哈孟雷特》，這标志着中国第一次有了以完整的戲劇形式并用白話文翻譯的莎士比亞作品。57頁

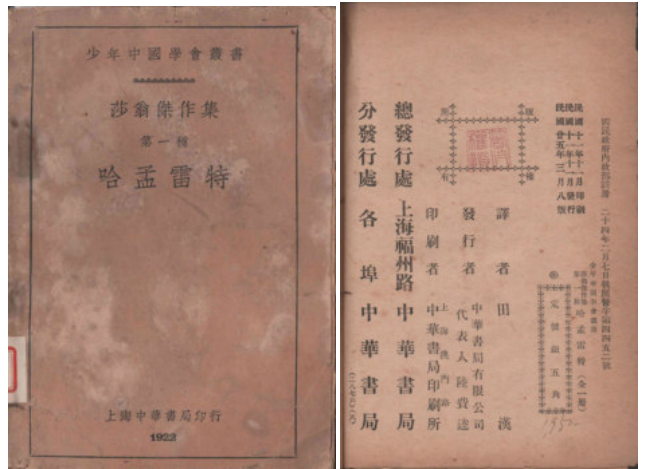
雑誌初出の題名が間違っている。上の文章に続けて単行本の序にある「某莎翁学者……」を引用する。欄外注に1922年刊行の単行本を示す。「某莎翁学者……」以下の文章が雑誌初出の掲載ではないことがわかるようにはなっている。やはりここは雑誌での題名が「哈孟雷德」であると説明する必要があるだろう。

それよりもせっかく引用した「某莎翁学者……」の文章だ。この「某」が誰なのか。どういう書籍から引いてきたのか。そういう疑問が自然に出てくる。だが、李偉昉の解説はない。引用するだけ。この興味深い謎については後で説明する。

漢訳題名を区別している例外がある。簡単に紹介する。張向華編『田漢年譜』(1992)^{*8}からの引用だ。

一九二一年 二十三歳
四月十六日 為訳作《哈孟雷德》(英国莎士比亞作)發表撰《訳叙》，説：自己聞舅父遇害後“哀憤填膺”，現“稍稍平靜，則

取莎翁《哈孟雷特》Hamlet 劇訳之以寄其情。”“訳此劇時，態度頗嚴肅而慎重。”載《少年中国》二卷十二期。51頁
 六月十五日 発表訳作《哈孟雷特》第一卷一至三場。歳《少年中国》二卷十二期。51頁
 一九二二年 二十四歳
 十一月九日 為訳著《哈孟雷特》出版単行本写《訳叙》……（後略）61頁
 （十一月）本月 訳著《哈孟雷特》一書由中華書局出版，為《少年中学学会叢書》之一。……（後略）61頁



表紙

奥付

雑誌初出が「哈孟雷德」であり単行本が『哈孟雷特』だと区別しているのがよい。雑誌「訳叙」から一部語句を引用して実物によって確認していることがわかる。雑誌表題は「哈孟雷德」でありながら「訳叙」の中では「哈姆雷特」を使用しているのだ。本文中と柱は同じく「哈孟雷特」であると注釈を加えればもっとよかった。もうひとつ「代序」があることにも言及すべきだ。

該書も田漢についての専門書でありながら漢訳する際に使用した底本については言及しない。ここがすべてに共通する不十分な箇所だ。

単行本は以下のとおり。

2 中華書局単行本（本文横組み）

訳訳者田漢、莎翁傑作集『哈孟雷特』上海・中華書局1922. 11/1936. 3八版（架蔵。もうひとつの影印本は奥付なし）。表紙は「少年中国学会叢書」。扉は「少年中国学会文学研究会叢書」。「訳叙」（1922. 11. 9）があるが雑誌初出のものとは別。

単行本は題名の1字を変更している。この異なった部分を見てほしい。

田漢自身も漢訳に使用した底本について説明していない。底本を明記しないのは清末民初時

期の中国においては普通のことだ。1921年になっても田漢はその慣習にならったものか。その結果、田漢が使用した莎劇原本の底本は現在にいたるまで明らかにされてはいない。そのかわりに日訳本が出てくる。あるいは日訳本があるから莎劇原本の探索は行なわれなかった。後に詳しく述べる。

結局のところ明確にするのは後の研究者の仕事だ。そうあって欲しかった。

2 瀬戸博士の記述

田漢は日本語を底本にして漢訳した、という主張がある。そう書く研究者は、莎劇原本について説明をしない。

瀬戸博士の専門書『中国のシェイクスピア』（2016）⁹から関係部分を引用する。

完全な中国語訳の出現は、やはり五四運動の後であった。一九二一年田漢訳『哈孟雷特[德]』が最初で、『少年中国』第二卷第十二期に発表され、翌一九二二年中華書局より単行本が発行された。当時の田漢に『ハムレット』を訳せる英語力があつたか疑問で、日本語からの重訳の可能性が強い。（後略）189頁

雑誌初出の題名が間違っている。実物で確認しなかったことがわかる。見ていて間違ったのであれば不注意だ。上文前半は戈宝権の説明(注5参照)とかぶさる。

瀬戸博士は田漢の英語力に疑問を呈し日本語経由での重訳を主張する。ところが田漢の「英語力があつたか疑問で」というだけでその証拠を出さない。「可能性が強い」と強調した。また底本にしたはずの日本語の版本について説明はしない。重訳というから莎劇原本については無視をする。先行論文を受け入れただけなのか、あるいは自分で調査した結果なのか記述がないから判然としない。

田漢が日本に来たのは、1916年18歳の時だった。1919年に東京高等師範学校聴講生となる。1920年、東京高等師範学校文科第三部(英語)に入学した(『田漢在日本』433-438頁)。

そうして1921年23歳で莎劇『ハムレット』の漢訳冒頭部分を雑誌に発表している。東京高師に在学中の翻訳である。この事実が瀬戸博士の記述に影響を与えたのかどうかはわからない。くり返すが瀬戸博士は疑問をいうだけで根拠を示さない。具体的な説明がない。それが問題だ。

聴講生になるよりも前の1918年に東京で原書を読んだ、と田漢自身が単行本「訳叙」に書いている[我読此劇原書在民国七年侍舅氏梅園先生居東京時]。瀬戸博士はそれについては知らぬ顔をした。

瀬戸博士の記述は説得力が皆無である。単なる印象を述べているだけにしか見えない。専門書だと思って引用した。だが、新しい発見はなにもなかった。その程度のものらしい。

瀬戸博士は、『海外奇譚』の漢訳者が正しく説明していることに対して誤解であると批判した。あらかじめ下した結論を強引に押しつけたからそうなる。また、林訳『吟辺燕語』について林紓の理解が不十分であるような印象操作をした。胡適の林訳批判について間違った説明を

した。文明戯「竊国賊」は、林訳『吟辺燕語』の「鬼詔(ハムレット)」にもとづき台詞を創作している。まさに瀬戸博士のいう「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」そのものだ。だが、林訳批判はするが文明戯批判はしない。研究における二重基準である。まだある。文明戯「竊国賊」の初演ではないものを初演であると文献操作をした。そうして田漢漢訳『ハムレット』では証拠を示さずに日本語からの重訳説を強調した。そうだろうな、と思うだけ。

陳凌虹は、瀬戸博士の該当部分を次のように翻訳している。

《哈姆雷特》的中文全訳本出現在五四運動之後，最早為1921年田漢翻譯的《哈孟雷特》，發表於《少年中国》的第2卷第12期，翌年由中華書局出版單行本。對於田漢是否有足夠英語能力翻譯《哈姆雷特》尚存疑問，因此筆者認為他的翻譯底本為日文版。178頁^{*10}

日本語原文とほぼ同じだから訳さない。ただし、漢訳の一部が原文とは異なる。日本語原文では「日本語からの重訳の可能性が強い」と書いた。陳凌虹はそこを訳して「筆者認為他的翻譯底本為日文版[彼の翻訳の底本は日本語版であると筆者は考える]」に変更している。陳凌虹の基準からいえば日本語原文の「可能性が強い」は、「底本は日本語版である」という断定になるようだ。読者からいえばこちらの漢訳の方が理解しやすい。 ㊦

【注】

- 1) 単行本「訳叙」で田漢は「四場」を発表したと書く。「三場」の誤記。
- 2) 上海戲劇學院、柏彬、徐景東等編選『田漢專集』江蘇人民出版社1984.3 中国当代文学研究資料叢書
- 3) 小谷一郎、劉平編『田漢在日本』北京・人民文学出

版社1997. 12

- 4) 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社
1994. 8
- 5) 戈宝権「莎士比亚作品在中国」中国莎士比亚研究会
編『莎士比亚研究』創刊号、杭州・浙江人民出版社
1983. 3所収。337頁。また『中外文学因縁——戈宝権
比較文学論文集』北京出版社1992. 7。464頁。次のと
おり。「莎士比亚の戯劇作品, 直到1919年“五四”運
動以後, 方被用白話文和完整的劇本形式介紹過來。首
先是田漢在1921年訳了《哈孟雷特》, 发表在当年出版
的《少年中国》雜誌上, 1922年作為《莎翁傑作集》第
一種由中華書局出版」
- 6) 李長林、楊俊明「莎士比亚作品在中国的傳播——
《中国莎学簡史》再補遺」『中国文学研究』1999
年第2期 1999. 4. 30
- 7) 李偉昉『梁實秋莎評研究』北京・商務印書館2011. 9
- 8) 張向華編『田漢年譜』北京・中国戯劇出版社1992. 12
- 9) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016. 2. 29
- 10) (日) 瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亚在中国：中国
人的莎士比亚接受史』広州・広東人民出版社2017. 1



『中国現代文学研究叢刊』2017年第10期(総第219期)

2017. 10. 15

- 《海上花列伝》“夜”叙事時空的近代建構……吳智斌
【書評】學術新空間与市民日常生活——評范伯群主
編《中国現代通俗文学与通俗文化互文性研究》
……劉祥安

『中国現代文学研究叢刊』2017年第11期(総第220期)

2017. 11. 15

- 【書評】評丁曉原《行進中的現代性：晚清“五四”散文
論》……王暉

『中国現代文学研究叢刊』2017年第12期(総第221期)

2017. 12. 15

- 戦争、革命、人之觀念的交織与流变——《漢訳文学序跋
集(1894-1949)》序論……李今

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

『瑞士建国誌』について
——漢訳「スイス独立史」

沢本香子

シラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) の戯曲「ヴィルヘルム・テル Wilhelm Tell」(1804) は、14世紀のスイスが舞台だ。オーストリアによる圧政からスイスが独立する物語である。

戯曲は3本柱により構成されている。独立運動、ウィリアム・テル(英語読み)、男女一組の恋愛だ。なかでも広く知られているのは、獵師ウィリアム・テルだろう。息子の頭の上に置いたリンゴを弓で射るように強いられたテル伝説を組み込んだ(第3幕第3場)。ただし、テルに焦点をあてて作劇されているわけではない。あくまでも複数いる重要登場人物のなかのひとりだ。

テルだけがシラー戯曲の中心人物ではない。そこからいくつかの記憶の齟齬が見つかる。

たとえば、リンゴ射的の場面は私が持っていた印象とは大いに異なる。テルの矢はリンゴに当たるのかどうか。手に汗握る場面だという思いがあった。ところがシラー戯曲では、様子が違う。舞台の手前で悪代官ゲスラーに男女ふたりが抗議している。その奥で矢が射られリンゴに当たったと一同の声があがるのだ。舞台、作劇上の都合なのだろうが、テルのリンゴは遠景に押しやられたように見える。

物語はのちにどのようにも改編されるという

例のひとつである。作者が異なれば重点の置き方も違ってくる。ここに注目しておく。

本稿において、ウィリアム・テルを主人公にした鄭哲(貫公)『瑞士建国誌』(1902)について考える。テルが登場人物だからシラー原作に関係するのだと考えられている。日本語翻訳を重訳したようでもある。詳細はどうか。

まず『瑞士建国誌』そのものを説明することからはじめる。

広東鄭哲貫公著、李繼耀校字『(政治小説) 瑞士建国誌』全10回(香港・中国華洋書局 光緒壬寅(1902))である。

私が見ている上海図書館複写本には奥付がない。「自序」に「壬寅八月二十日」とあるから1902年9月21日以降の刊行だとわかる*1。

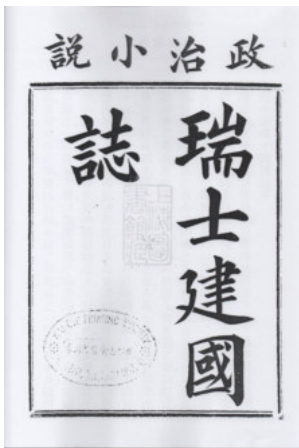


図1: 扉



表紙

1 序文

最初に序3篇が置かれる。

●趙必振序

趙必振曰生「政治小説瑞士建国誌序」の文末には「序於日本之争自存齋」とある。日本で書いたらしい。

趙必振(1873-1956、湖南常德の人)は、自立軍を組織し蜂起しようとしたが失敗し日本に亡命した。横浜で『清議報』『新民叢報』の編

集などに従事したことがある。

序の内容は小説の効用を称賛するものだ。大意を示しながら説明する。

西洋人は外国に行くかどうかという小説が流行しているかを質問する。それによってその国の人心風俗政治思想がわかる、という。(趙必振は中国に存在する多くの旧小説を否定し)イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス各国の振興は、小説の効用による。日本が維新の時にも小説によって民智、すなわち人々の智恵をひらいた。中国の知識人もそれにならい、「佳[佳]人奇遇」「経国美譚[談]」「累卵東洋」などが踵を接して出現した。

ここに具体例として掲げられた漢訳作品は、それぞれ以下のとおり。

柴四郎「(政治小説) 佳人奇遇」は『清議報』第1-35冊(1898-1900)連載、矢野文雄「(政治小説) 経国美談」は『清議報』第36-69冊(1900-1901)連載、大橋乙羽「累卵東洋」は愛善社(1901)印刷を指す。すべてもとは日本の作品だ。

趙必振は、次に『瑞士建国誌』へ筆を転じる。スイスがドイツに隷属していた時、圧制に人々が苦しんだ。偉人ウィリアム・テルが声をあげ、国民は立ち上がり異国の束縛から脱した。

オーストリアではなくドイツとするのは、『瑞士建国誌』に出てくるのがドイツだからだ。「異国之羈勒」という表現から、自然に1902年当時の中国に話がつながる。すなわち4億(四百兆)の人民が『瑞士建国誌』を読んでスイスにならい清朝からの独立運動を始めることに期待をよせる。そうなれば鄭貫公の作品が効用を発揮したことになる。

ここは異民族である清朝からの独立願望を投影しているのがわかる。またこのはっきりとした小説効用論は、説明するまでもなく梁啓超の「訳印政治小説序」からそのままを引き継いだものだ。

任公(梁啓超)「訳印政治小説序」(『清議報』

第1冊光緒二十四年十一月十一日1898. 12. 23) である。

梁啓超は該文において、政治小説は西洋人が始めた、と冒頭に述べる。

中国における小説でよいものは少ない。英雄といえば「水滸伝」、男女といえば「紅樓夢」で総じて盗みを教え淫猥を教えるところから出ない。昔の欧州各国では小説を变革の手段にしたから一書が出れば全国の議論はそれで一変した。各国政界が日に日に進んだのは政治小説の功績が最も大きかった。英国の名士で「小説は国民の魂だ」とさえ言った人もいる、云々。

趙必振は、梁啓超の小説効用論をなぞっている。具体的な小説として『清議報』に掲載された「佳人奇遇」「経国美談」をあげることからも理解できるだろう。

●李繼耀序

つぎの李繼耀「校印瑞士建国誌小引」を見ると、李繼耀は、鄭貫公の知人であることがわかる。

李繼耀は、1901年に鄭貫公と日本で知りあった。序に「壬寅桂月」と表示し1902年だ。「桂月」は旧暦八月を指す。「去歳」と書くから1901年の出会いとなる。

鄭貫公は、大衆を奮い立たせ人々の智慧を補う政治小説がないものかと考えていた。そこで日本書を選んで翻訳することを李繼耀は勧めた。しかし鄭は当時、報館の主筆をつとめていたのでその暇がない。李は香港にもどった。あとから鄭が香港の新聞社に招かれてやってきた。鄭貫公の取りだしたのが『瑞士建国誌』の原稿だった。

原稿が出てくるのはそういう経緯だ。ここに見える「報館の主筆」というのは、鄭が1900年に日本東京で創刊した『開智録』のことだろう。のちに鄭貫公は香港『中国日報』の記者となった。李繼耀は、原稿の校訂を行なつたと書いている。『瑞士建国誌』影印本には奥付が欠落し

ているが香港で刊行されたとすれば、つじつまがあう。

●鄭貫公序

鄭貫公(1880-1906、広東香山県の人)は家が貧しかった。太古洋行横浜支店で買弁をしていた親戚を頼って日本に渡り働いた。横浜大同学校で学び、のち『清議報』の編集者を勤める。馮自由と『開智録』を創刊し鄭貫公は該誌に「摩西伝」も掲載した。1901年、香港『中国日報』の記者となったのは孫文に勧められたからだ*2。

鄭貫公父「自序」の末尾には「序於香海之文明齋」とある。香港で記した。該書の刊行は彼が香港にいた時期に合致する。

著作の意図は、文中に書いてある。「よそから出る石でわが玉を磨く[他山之石。可以攻玉]」という語句に集約される。ウィリアム・テルを手本にして祖国が直面している異民族からの圧制をはねかえしたい、という意味だ。しかし、手本にしてといっても鄭貫公自らがテルになって運動の先頭に立とうというわけではない。そういう英雄がいたことを中国人に知ってもらいたいという範囲内におさまる。啓蒙活動のために外国の政治小説を翻訳する。あくまでも新聞界に在籍する言論人としての役割をわきまえている。

細かいことをいう。小説の舞台となるスイスの時代背景を説明してその中に勘違いがある。

「十二世紀」と書いて「中国元朝元貞年間」と注する。元貞は二年まで、西暦でいえば1295-1297年に当たる。13世紀というのが正しい。鄭貫公は知識人であるが世紀という考え方にはなじまなかったようだ。それよりも、細かな事実は小説には必要がないという考えなのだろう。

興味深いのは「例言」である。

一是書故事。初由西文訳為日本文。復從日文訳其意。著為小説。転接之多。増刪遺

略。在所難免。然小説不比正史。事不必盡有。而理不可無。総求描情写景。明白了利為近旨。

ひとつ。この物語は、はじめ西洋語から日本語に翻訳され、さらに日本語から訳して小説にした。取り次ぎが多いから増加削除省略はまぬかれない。しかし、小説は正史とは異なる。事実は必ずしもすべてがある必要はないにしても、道理は不可欠だ。総じて情景描写が求められる。その長所は理解しやすい主旨にあることを明らかにした。

後半の「小説は正史とは異なる」という理解からすれば、すこしくらい事実から離れてもかまわないことになる。だからこそ歴史には実在しないウィリアム・テルを主人公にした日本語作品を底本に選んだ。テルが伝説上の人物であることを鄭貫公が知っていたかどうかはわからない。小説は歴史とは違うのだから矛盾するところはない。

前半部分に私は注目する。『瑞士建国誌』の成立過程を説明している。

「ウィリアム・テル」がシラーの原作だから、その日本語訳が鄭漢訳の底本になったと読める。鄭貫公は日本で学んでいるから日本語を経由していても不思議ではない。ただし、はたしてシラー戯曲がもとになったかどうかは定かではない。

ところが、中国では創作説が根強く存在している。

阿英目録96頁は創作とする。阿英の断定は、以下に影響を与えた。

江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』(北京・中国文聯出版公司1990.2/1991.9再版。850頁)が本作品を掲載している(孫継林執筆)のは、創作作品だと考えたからだろう。鄭貫公が日本語からの重訳だと書いているのを無視した。

武禧(劉徳隆)「零七三 鄭哲」(「晚清小説作者掃描(15)」(2008。参考文献を見よ)も同じ。

もうひとつは羅衍軍「歩武瑞士 肇建新邦——鄭貫公与《瑞士建国誌》」(2008。参考文献を見よ)がある。

「『瑞士建国誌』は、鄭貫公が「ウィリアム・テル」を底本にしその他の素材を吸収し創作して成ったものに違いない〔《瑞士建国誌》は鄭貫公以《維廉・退爾》為藍本、并吸收其他素材創作而成的〕」19頁

羅衍軍も鄭貫公自序の記述があるにもかかわらず創作だと考えている。日本語翻訳を見つることができなかったのがその原因だと思われる。

さて、序文を書いた趙必振、李繼耀らはともに鄭貫公にとっては日本で知り合った人たちだ。その環境から考えても日本語による翻訳作品を底本にしたことは自然な流れであった。

「例言」からもうひとつを引用する。

ひとつ。小説は人々の智慧を開拓し人心を憤激させるところが貴重だ。本作は文章を敷衍しただけではない。実に人心と社会の道理に対して大いに役立つ。

一小説以能開拓民智。激憤人心為貴。是書之作。非徒敷衍筆墨。實于人心世道。大有裨益。

鄭貫公の述べる小説効用説は、梁啓超の主張と一致している。

2 「瑞士国計表」という一覧表

スイスの国勢調査表というべき一覧表が掲載されている(図2)。

土地、人口、税金の細かい数字だ。人口は「三百一十一万九千六百三十五名」とある。1の位まで明記して詳細だ。

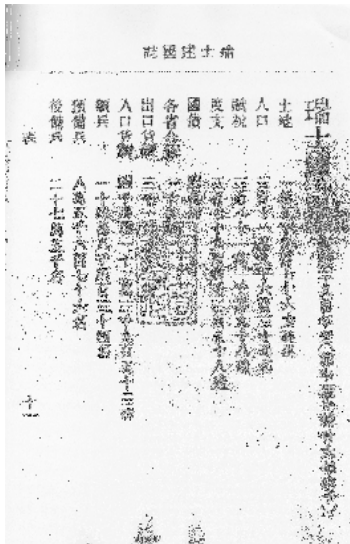


図2

その年度は1900年（光緒廿六年庚子）とする。13、14世紀が舞台の『瑞士建国誌』であるにもかかわらず1900年（いうまでもなく19世紀。20世紀は1901年から）の統計数字をあげるのは整合性に欠ける。たまたまそれしか手元になかったのかどうかはわからない。スイスの概要を示すのが主目的だったのだろう。時間の隔たりに問題があるとは意識されなかったらしい。

つぎに掲げられたスイス地図も奇妙だ。

3 「瑞士図」という地図——1840年代のもの

スイス全土を簡略に描いた地図が収録されている（図3）。



図3

地図だからなにもないところから自力で描くのは、普通にいったらむづかしい。どこかにあるものを参照したと考えるのがよい。

たとえば、魏源『海国図志』（1843/1847-48増補/1852。3冊 長沙・岳麓書社1998. 11）の上冊「欧羅巴州各国図」に「瑞士国図」228-229頁がある（図4）。

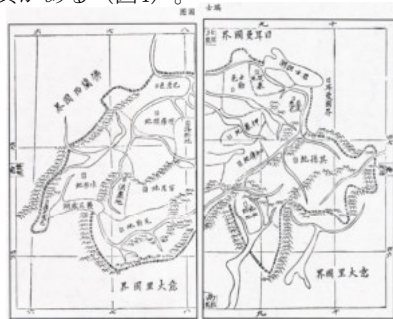


図4

これは『瑞士建国誌』所収の地図と似ているにしても細部が異なる。

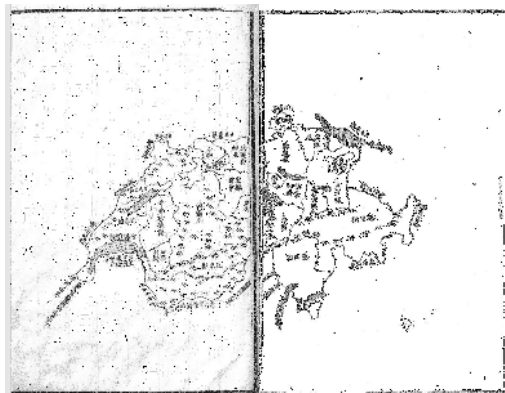
例をあげると西のレマン湖、別に称して英語のジュネーヴ湖だ。『海国図志』では義尼威湖となっているからジュネーヴ湖でよい。正しく記載している。

しかし、『瑞士建国誌』は同じ湖を官斯丹薩湖としている。英語でコンスタンツ湖、ドイツ語でボーデン湖だ。本来はスイスの東北にある。表示が間違っている。『瑞士建国誌』は正しくない地図を掲載した。『海国図志』は正確に描いているのだから、不正確な地図はどこから引用したのか。

『瑞士建国誌』がもとづいた地図は、『瀛環志略』である。

『瀛環志略』（道光戊申1848年）は、世界各国の事情を概説した地理書だ。その巻5に「欧羅巴瑞士国」がある。これに収録されたスイス地図（図5。ウェブから引用）

図5



を下敷きにして模写したのが『瑞士建国誌』所収の地図である。

『瑞士建国誌』はなぜ『海国図志』ではなく一部が間違っている『瀛環志略』を採用したのか。

思うに、ウィリアム・テルの舞台となる3州が記載されているかどうかの違いによる。

すなわちフィアヴァルトシュテッテ湖(名称は地図にない)の東からシュヴィーツ(執義的)、南のウーリ(烏黎)、西のウンターヴァルデン(翁徳爾瓦里的)の3州だ。それらの記載が『海国図志』所収の地図にはなかった。だから、その地名を記した『瀛環志略』の地図のほうを一部に間違いがあるがあえて採用したと推測する。

ついでにいえば、せつかくのスイス地図だが1840年代に中国で作図されている。ウィリアム・テルの14世紀とは時間が遠く離れる。これも「瑞士国計表」と同じく大要を示すためのものだ。時代が異なっていようと人々の知識を増やすことが政治小説の役割だと割り切った鄭貫公の判断だろう。

4 『瑞士建国誌』全10回の大要

各回の内容を簡単に紹介する。「注」に私が気のついたことを記す。シラー戯曲に言及するのは、今の段階で日本語翻訳作品を特定することができないからだ。比較対照するためにはシラー戯曲しかない(後述)。ここでシラー戯曲を持ち出すのは、正しい方法ではないことはわかっている。暫定的なやり方だにご了解いただきたい。

○第1回

12世紀(「自序」で述べたのをくり返している。中国元朝元貞年間というから13世紀が正しい)のヨーロッパ中央にスイスという小国があった。占領したドイツのルドルフ(羅徳福)は、

息子のアルブレヒト(亜露覇)を派遣し統治させた。その臣下のヘルマン・ゲスラー(希路曼・倪士勒)は悪辣をきわめた。ウーリ地方に有名なウィリアム・テル(維霖惕露)がいた。故国をドイツから奪回することを親友たちと議論していた。

注:スイスの歴史的状況を簡単に説明して、すぐさま英雄ウィリアム・テルが登場する。ドイツから祖国を奪回するために行動をとると明らかにしている。最初から主人公として出現しているところに注目したい。ここがシラー戯曲とは異なる。

○第2回

帰宅したテルは、妻ヘートヴィヒ(漢訳名はない)に仲間と故国回復について議論をしたことを告げる。両親の言葉を聞いた息子ヴァルター(華禄他)までもが故国回復を進言する。そこへテルの親友アルノルト(亜魯拿・穆勒得木)が訪問してきた。彼もドイツの人の非道なことを訴える。(独立する)時は来た、機会を失うべきではない。

注:妻の漢訳名がない。息子はひとりだけが登場する。シラー戯曲では弟がいるのを無視した。ないことにしたのは底本か鄭貫公かは不明。メルヒタールに穆勒得木を当てた。これは地名だが、姓として呼んでもいる。だから鄭貫公は最初から姓として理解した。また、アルノルトの容貌を説明したうえで「三国志の関羽公が再現したようだ」(9頁)とつけ加えて中国化した。

○第3回

アルノルトと父親は牛を連れて畑仕事に出かけた。悪代官ゲスラーの兵士が通りかかり、アルノルトらの牛を見て奪おうとした。父親がそれを阻止する。アルノルトも抵抗して兵士らを罵る。殴り合いになり兵士を撃退した。知らせを聞いた悪代官ゲスラーは手勢を引き連れて襲ってきた。父親は捕まり殴打され、逃れたアル

ノルトには賞金が懸けられた。話を聞かされた友人たちは同じように憤激した。愛国党と名乗り檄を發して広く同志を集めることになった。

注：シラー戯曲では、アルノルトの父親は両眼に熱い鉄の棒を突き刺された。鄭貫公はそこまでは書いていない。檄文に関しては底本にあるのか、それとも鄭貫公の創作かは今の段階ではわからない。愛国党については、シラー戯曲には存在しない。

○第4回

スイスには民間秘密結社(会党)がひとつあった。アルノルトは檄文を持ってそこを訪問した。頭目は3人いる。名前は翁徳華丁、師格哇、盧多利だ。彼らと意気投合した。一方、アルノルトと分かれたウィリアム・テルは、斯知念地方の志士威里尼(参考：日本『元氣』24頁壯士ウイルニー)の訪問を受ける。テルに早く行動に出るように勧める。テルたちはアルノルトを探して雷鳴轟く風雨について河をわたった。アルノルトと再会し彼の父親が悪代官ゲスラーに殺害されたことを伝えた。テルは檄文を読むと称賛し、その場で一同との宴会になった。テルは「愛国歌」を作り歌った。その後は、おのおのが救国救民の演説をした。すでに東方が白んでいる。

注：シラー戯曲第2幕では3地方の代表が集まって同盟の誓いをたてる。リュトリの誓いという。『瑞士建国誌』の底本はそれを改変したものか。あるいは、鄭貫公の筆になるのだろうか。ここも、不明としておく。テル作「愛国歌」そのものがシラー戯曲には存在しない。

○第5回

アルノルトとテル親子は明年正月に蜂起することを約束して分かれた。ウィリアム・テルは、息子と狩りに出かけた。多くとれたので市場で売りつくし茶楼で夕食にした。外が騒がしい。見に行った。

注：テルと悪代官ゲスラーが直接対立するまでにはもうすこし時間がかかる。

○第6回

町に長い木柱が立てられその頂上に帽子が置かれている。石碑がありそこには、ここを通過する人はかならず脱帽しお辞儀をしなくてはならない、と書いてある。そういうことがあるのか、とテル親子はそのまま帰っていった。悪代官ゲスラーがこの計略を思いついたのには理由がある。彼はスイスに愛国党という民間秘密結社があることを知り、それを早期に根絶やしする必要を感じた。帽子の掲揚は愛国黨員をあぶり出すための手段であった。テルは息子と2、3日相談してから町へいった。帽子が懸けられた柱を両断したから兵士によって捕らえられた。裁きの場において、テルは長年にわたり自分の土地を奪い自分の人民を害するドイツが強盗であることを強く批判する。殺すなら殺せ。

注：シラー戯曲には柱をうち立て帽子を置いた理由についての説明はない。権力をかさにきて人々にお辞儀を強制し侮辱を加えるためのように見える。ところが『瑞士建国誌』では愛国党との関連づけをしているところが異なる。ちなみに、日本『元氣』を底本にした漢訳『警史』にもそのような説明がある。謀反人を判別するために利用するという。

鄭貫公のテルは、柱をへし折るつもりで出かけた確信犯だ。しかも、短慮である。スイス独立運動を指導する主人公として設定しているから、そこからも逸脱せざるを得ない。シラー戯曲でのテルは、独立運動からは孤立している。だからこそ帽子に気がつかず捕まると謝ってしまう彼の存在は自然だ。ところが、鄭貫公はテルを考えの足りない熱血漢の英雄にしてしまったかのようなのだ。そういう人物では独立運動という大事業の指導者になる資格がないではないか。人物設定に基本的な無理が生じている。そう書き換えたのは底本の日本語翻訳本か鄭貫公自身

なのかわからない。リングを的にする場面は後まわした。

○第7回

リング射的の物語がはじまる。

裁きの場で悪代官ゲスラーはテルに死期が来たことをいう。ただし生き残る機会をひとつ与えた。息子の頭にリングを置き、「十数里」離れて射落とせと命じる。当たれば罪を赦して帰宅を認める。失敗すればふたりとも死ぬ。テルは失敗したときは悪代官ゲスラーを殺すことにして矢を1本多く与えてくれるよう要求した。テルは周囲の人々にむかって今後救国のために励み協力するように話す。矢はリングを射落とした。テルは堂々とし、悪代官ゲスラーは慌てふためく。テルは先に矢を2本与えるように言った理由をあかす。失敗したときはもう1本の矢でお前のつまらない命を奪うつもりだった。その場で死刑に処するところだが悪代官ゲスラーは、テルの仲間が救出にくることを心配した。その夜、テル父子を別の場所に移すため舟で水路を行った。突然、雷が轟き風雨がまき上がり舟に水が入ってきて操縦不能におちいった。この窮地から脱出するためには、舟の舵取りも得意なテルに操船をまかせるよりしかたがない。テル父子は操っていた舟から川岸へ飛びのり逃亡した。

注：悪代官ゲスラーがこの法廷において確信犯テルにチャンスを与えることは意味が不明だといえないこともない。的にしたリングに当たれば罪をゆるす。ならば、柱をへし折った行為を咎めないことになる。わざわざ法廷で裁くことは必要ではない。確信犯に対する悪代官ゲスラーの対処法としては一貫性がないともいえる。ただし、悪代官ゲスラーにしてみれば、万が一にもテルが射的に成功するとは思えない。「わし(悪代官ゲスラー)は最初お前に会ったとき、ただの農民だと思った。お前を殺してしまえば罪のない殺しようになる。だからこの

難題をもってしてお前ら父子が自ら死ぬようにさせようと考えたのだ」これが悪代官ゲスラーの弁明だ。物わがりのいい悪代官ではないか。違和感が生じる。その場のなりゆきでリング射的が偶然に発生したシラー戯曲と比較すると、法廷を設けただけ事が過大となって劇的要素が薄れた。

また、リングとの距離が「十数里」というのはどうか。一里が500メートルとすれば、少なくとも5キロメートルであって現実的ではない。50余歩であればまだ理解できるが、それでも遠すぎる。シラー戯曲では明確な距離指定がない。次の台詞はある。「ゲスラー それではテル、お前は百歩も離れて、木から／林檎を射おとすそうだから、ひとつその腕前を／眼の前で見せてもらおう。さあ、弓を取れ、——」桜井訳 123頁

テルは最初から2本の矢を要求したことに改変したのにも問題がある。シラー戯曲では、2本目の矢を隠し持っているのを悪代官ゲスラーが尋問してテルの口を割らせたのだった。明らかに異なる。矢を要求したということは、テルは弓矢を持参していなかったことになる。奇妙だ。もとから自分の矢であるものを、2本持たせるように要求したというのであれば納得しないわけではない。どのみち説明が不足している。

○第8回

テル父子が悪代官ゲスラーから逃れて林中で気づいたのは、その時こそスイス愛国党が蜂起する日だった。テル父子はアルノルトと合流した。テルは仲間に向かって、リング射的の様子、舟で脱出した経緯などを説明した。故国を回復するためにはまず悪代官ゲスラーなどの賊を殺さなければならない。同胞万歳、スイス万歳。一方の悪代官ゲスラーは、テル父子を追跡していた。それを待ち伏せていたテルは矢を放って彼を殺害したのち愛国党の人々と再合流する。人々はテルを大元帥に、アルノルトを大將軍に、

ヴァルターを先鋒に任命した。

注：シラー戯曲ではテルの息子ヴァルターは10余歳だ。「先鋒」に任命された息子は、鄭貫公の設定では青年ということか。孤立しているはずのテルが大元帥に任命されるとはシラー戯曲から大きく離れる。

○第9回

アルブレヒトは、悪代官ゲスラーがテルに射殺されたと知らされた。怒ったアルブレヒトは、陸と水から攻撃するためにドイツ兵数千名を動員することにした。一方で愛国党の人数は増加していた。テルは「同盟恢復歌」を作る。テルは手に大鉄斧を持ち頭には銀兜をいただき身には鎧をつけモルガルテン（馬路加汶）地方へむけて進む。アルブレヒトはそれを迎え撃つ。戦いの末、アルブレヒトは敗走した。ドイツ兵数千は愛国党数百人に破れた。テルは共和政体を樹立し独立を恢復した。西暦1315年、中国元朝延祐四年のことである。

注：第4回の「愛国歌」とこの「同盟恢復歌」は鄭貫公の創作だろう。1315年であれば、中国元朝延祐二年に当たる。中国暦となぜ不一致なのか理由が不明。

○第10回

君主専制ではなく民間から議院を開き選挙によって総統を選ぶことにした。テルは総統にならないことを決意し何度もあげられたが職にはつかず隠居した。1343年、中国元朝元統二年にテルは死去した。葬式で読まれる長い祭文が続く。その後、悪代官ゲスラーを射殺した洞穴にはテルを記念する銅像が建てられ皆は参拝をした。中国の清明節のようだ。スイスが共和国となった後の状況が理想郷であるかのように説明される。

注：シラー戯曲の時制は1307年にまとめられている。鄭貫公の『瑞士建国誌』は、モルガルテンの戦いが1315年だからそれを出すために時

期をふくらませた。また、1度の勝利だけでスイスの独立が成立したわけではない。変更したことになろう。ここでも西暦と中国暦の換算間違いがある。テルが死去した1343年は、元朝至正三年でなければならぬ。元朝元統二年であれば1334年である。また、テルを追悼する長文があり、これはいかにも中国人の手になるものだ。

『瑞士建国誌』は、ウィリアム・テルを主人公にして首尾が一貫している。完結したひとつの小説だ。

注において『瑞士建国誌』がシラー戯曲とは異なっているところをいくつか指摘した。いってしまえばシラー戯曲とは直接の関係がない。戯曲をもとにして鄭貫公が創作したという可能性はほとんどない。

念のために記す。大きな違いはウィリアム・テルを物語の主人公に設定したところだ。底本とした日本語翻訳がそのようになっているのを踏まえていると考えられる。ゆえに、基本をいえば『瑞士建国誌』とシラー戯曲を比較することに意味はない。今の段階で底本が不明だから便宜的にシラー戯曲を出した。そこであらためて底本問題が出現する。

それにしてもテルの死去を1343年だと明記したのは違和感がある。架空の人物だから死去の時間も架空であっていいという考えだろうか。たとえば、久松義典『万国史略』（集英堂1880. 10. 29）では、テルの死去を千五百三十四年と誤植して示す。1334年だろう。また、死因を溺死として1350年とするものもある（コルリール Collier 著、河津孫四郎訳述『西洋易知録』知新館1870、巻之4下6丁ウー7丁オ。国立国会図書館デジタルコレクション）。鄭貫公が1343年という具体的な数字を示したのは何かの根拠があるはずだ。ここも底本のままなのか。

以上のようにいくつかの疑問が出てくる。次は日本語訳本を見ていく。

日本ではドイツ語から直接翻訳されたものがいくつか刊行された。原題が英語読みの「ウィリアム・テル」でありながら、別の名前をあたえられている。

5 漢訳に関係がありそうな日本語訳

参考文献で示した木村毅、齋藤昌三ら、柳田泉、井澤睿子、徐黎明にもとづきいくつかの作品を発行順で一覧する。ウィリアム・テル関係ということでもまとめた。シラー戯曲に限定していない。あくまでも参考だからはじめから対象外のものも含めてある。訂正した部分があることを言っておく。便宜的に番号をふった。

記号について結論を先にいう。×は漢訳の底本ではないことを示す。

1×シルレル（フリードリヒ・フォン・シラー）著、齋藤鉄太郎訳『瑞正独立自由の弓弦』（ウィリアム・テル）、出版人白水増吉、1880. 12. 26。

注：未完。散文体。柳田泉編『明治文化資料叢書』第9巻翻訳文学篇、風間書房1972. 9. 15所収

2×視而列爾（シルレル）著、松湖漁史（山田郁治）訳述『哲爾自由譚 一名自由之魁』前編、甘泉堂、丸善書店、泰山堂1882. 10。

注：前編のみ。国立国会図書館デジタルコレクション

3 蘆田東雄『（字血句涙）回天之弦声』12回 乾坤2冊 出版人：鎗田政治郎、賣捌人：一光堂、1887. 11。

注：半窓睡仙。冒頭に「瑞西国沿革紀事」が別にある。国立国会図書館デジタルコレクションは初版。下巻第2丁が落丁。架蔵のものは出版人：伊藤武彦、賣捌人：金鱗堂、1888. 10再版。初版とは挿絵の位置が異なる箇所がある。後で説明する。

4 谷口政徳（暎天逸史）編訳『（血涙万行）国民之元氣』前後編、金泉堂1888. 1

注：シラー原作ではない。漢文「瑞西独立小史」あり。後で説明する。

5 霞城山人（中川霞城）訳「（維廉的兒）自由之一箭」『少年文武』創刊号一第2年第3冊（1890. 1. 17-1891. 3. 30）連載

注：シラー戯曲の翻訳。脚本のまま。部分複写で見る。後で説明する。

6×巖谷小波訳「脚本 瑞西義民伝」『文藝倶楽部』第9巻第15号1903. 11. 1。ウイヘルムテルの一節

注：巖谷小波翻訳「瑞西義民伝」上演、1905. 3明治座

7×（シルレル「ウイヘルム、テル」）徳田秋江（浩司）著『シルレル物語』富山房1903. 12. 24。通俗世界文学第9篇。

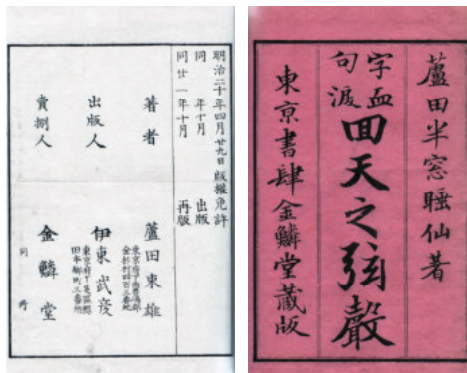
注：小説化本。国立国会図書館デジタルコレクション

8×シルレル原著、佐藤芝峰訳『うみるへるむてる』秀文書院1905（一名瑞西義民伝）。完訳

上の日本語訳本に『瑞士建国誌』の1902年刊行を当てはめる。

未完である1と2が外れる。6 7 8は1903年以降の発表だからこれも底本にはならない。

底本の候補作品として残るのは3 4 5だ。



● 3『（字血句涙）回天之弦声』のばあい「例言」から引用する。

……一二知留連氏ノ楊爾譚ニ依リ傍ラニ

三ノ瑞西史ヲ以テ参考ニ供スルノミ故ニ
往々架空ヲ免カレス 1丁ウ

これは、半窗睡仙「自序」にある「西留連^{シルレル}氏の楊爾譚に依り」(4丁ウ)と重なる。「シルレル」すなわちシラー戯曲のなかのウィリアム・テル物語を中心にしたということらしい。

柳田泉が「内容はスイス民権沿革の演義体小説である。もちろんシルレルの『ヴィルヘルム・テル』その他を材料にしたものであるらしいことは、一見して明白である」(88頁)と書いている通りだ。

『回天之弦声』(以下『回天』と略す)の冒頭に「瑞西国沿革紀事」を配置したのは日本の読者の理解を助けるためだ。

第1回、獵師維尼(ウキルニー/ヴェルニー)、牧者格王尼(ウワーニー/クオニー)、水夫格男泥(クワデー/ルーオディー)が登場する。カッコの前者は『回天』のルビであり、後者はシラー戯曲の表記だ。そこに波武我天(バウムガルテン/同左)が血を浴びたまま追われてくる。代官を殺したという。暴風雨が来るから舟は出さない。いや乗せろ。ここに來かかった維廉楊爾(ウルヘルムテル)が文字通りの助け船を出した。

ここはシラー戯曲をもとにしていると言っていい。だが、『瑞士建国誌』とは異なる。

テルが登場するのは第4回までにすぎない。『回天』を「ウィリアム・テル物語」とするのは無理がある。テルは主要登場人物のなかのひとりなのだ。奇異な印象が発生するのは、リング射的の場面がないからだ。これには驚くとともに落胆する。第3回で亜爾美杜^{アルミトバルトリ}が魯多利の深谷で襲われ(死去し)たとある。第5回には彼の息子^{アルナダス}亜爾那脱が身よりなく叔父に財産を狙われる。アルナダスは旅に出る。

第8回 アルナダスが展開する長文の「書生論」12丁オ-16丁ウはウィリアム・テル物語とは関係がない

第9回 アルナダスは悪代官(『回天』では奉行)ゲスレルの老臣留原^{ルゲル}の娘^{アーリー}亜黎に会う。ルゲルがゲスラーに差し出した諫言状(21丁ウ-26丁オ)が珍しい。ゲスラー側内部の様子を説明した書物は少ないのではなからうか。「人民有リテ而シテ後始メテ政府アリ政府アリテ而テ後人民有ルニ非ルナリ。故ニ人民ハ本ナリ政府ハ末ナリ」(22丁ウ)などと真つ当なことを綴っている。

第11回より老人^{フライヘルマンアツテックハウゼン}浮来辺保温^{シラー}高善(シラーでは男爵アツテックハウゼン)が登場する。甥^{ルーデーツ}の留田通(シラーではルーデンツ)との会話が長い。大筋はシラー戯曲第2幕第1場だ。

第12回終わりには、次のような説明がある。

維廉^{ママ}蟻[楊]爾、須達夫、華辺留、阿留那脱等の諸士与に慷慨有為の士なりと。嗚呼。諸士は何れの処に如何なる日月を送るや。読者と与に之を後日に見んとすと。坤47丁オ

ウィリアム・テル、シュタウファッハー、アルナダスらの名前を出すだけ。彼らがどのように活躍したかは述べない。こうして『回天』乾坤2冊は完結する。モルガルテンの戦いはなく、テルの死去もない。これを一般には肩すかしという。

『回天』の中身は、「ウィリアム・テル伝」ではない。ましてや「スイス独立史」というわけでもない。それらは背景に組み込まれてはいる。しかし、スイスは独立しない。全体から見れば中途半端な結末で放り出した未完製品だ。『瑞士建国誌』がウィリアム・テルで統一されていると比較しても、作品として首尾が整ったものだとはともいうことができない。

『回天』は、『瑞士建国誌』の底本ではない。徐黎明は、日本の『国民之元氣』(後述)と『回天之弦声』をあげて人名地名などの類似点を指摘する。その結論は次である。

「意識と創作部分がとても多く、文体上言語上すでにとても中国化している『瑞士建国誌』は、それが日本を源流にしているとはいえ当時日本に流布していたいくつかの資料を参考にしたとほぼ判断できるだけだ。その中で特に重要なのは蘆田東雄の『回天之弦声』である〔意識和創作部分極多、文体上語言上已經極為中国化的《瑞士建国誌》、其日本源頭、只能大致判断是参考了当時日本流行的幾種資料、其中最為重要的、則為芦田東雄的《回天之弦声》〕」(325頁)

私は、『回天』は『瑞士建国誌』の底本ではないと判断している。参考にしたかどうかはわからない。

徐黎明がもうひとつ結論的に述べるのは「日本語底本を明確に探し当てることはむづかしい〔難以清晰地覓到日文底本〕」(339頁)だ。こちらの意見には賛成する。

ついでに触れる。徐黎明はいまだに林紘がイブセン戯曲を小説にして翻訳したと書いている(326頁)。それが誤りであることが明らかにされたのは2007年だ。中国は広いから情報が伝わっていないらしい。

●4 『(血涙万行) 国民之元氣』のばあい

漢文で書かれた「瑞西独立小史」が冒頭に掲載されている。歴史的な知識があれば作品の理解がすすむという著者の考えなのだろう。

「例言」には基づいたのが歴史書であると書いてある。するとシラー戯曲とは違うことになる。

ウィリアム・テルはなかなか登場しない。後編第10回に「布爾古連の維廉別爾」(6頁以降では「楊爾」)として出てくる。テルが生まれたとされる村は「ビュルグレン Buerglen」だ。それを布爾古連とした。テルは物語の主人公ではない。

スイス独立史を基礎におきながら、紙幅の多くは別物だ。独立運動の中心となる人物ふたり

をめぐる恋愛物語に、小さいころ誘拐された妹を探す物語がからめられる。また、魔法にかけられたライオンは王子だったという変身譚までも挿入されてもいる。全体の印象からいえば、冒険恋愛小説なのだ。

結局のところ、該作は『瑞士建国誌』の底本ではない。別作品の底本になった。すなわち、陸龍翔(朔とするのは誤り)が翻訳した『瑞西独立警史』(日本・訳書彙編社、光緒29(1903))である(別稿「『瑞西独立警史』について——漢訳「スイス独立史」」を参照のこと)。

●5 「(維廉的兒) 自由之一箭」のばあい

最初に参考文献の説明を見た。以下のように書いてある。

木村ら49頁 明治19年「得廉自由の一箭」シルレル、中川霞城、少年文武「『ウィルヘルム・テル』の訳で、却々巧な訳しぶりであつたやうに思ふ」
柳田188頁 「維廉得自由の一箭」SCHILLER: WILHELM TELL (23年発表)

該訳文の部分的複写を見ている。木村らと柳田の示す題名が一致しない。「維廉的兒」ウィリアム・テルは、もともと角書あつかいである。

第1幕第4場から一部分をまず霞城山人訳文から引く。参照のために桜井訳をうしろに掲げる。

悪代官ランデンベルクの命令で父親が両眼を抉られたと聞いたアルノルトのことばだ。

【霞城山人】貴き天の恩物は、此の両眼の明なり、野山を走る獣より、空飛ぶ鳥も水遊く、鱗族迄も皆活て、生を喜ふ其訳は、日光の恵あればこそ、一一草木でさへも嬉し気に、午影の方に向ふぞや、それにいとしや父上には、四方摸りて烏婆玉の、盡きぬ闇夜の

そのなか
其中に、独り 蕭然おはすとは、(後略)
36頁

【桜井】おお、てんからたまわったもの
の中で、
眼で見る光が一番大事です、どんな生き物
もです。——
植物のような物でさえ、飲んで光の方へ向
きます。
それなのに僕のおやはくらやみの中で不
運にひたっていねばなりません、
とこやみの中にです。(後略) 45頁

霞城山人の日本語訳は、語句を補いながらこ
なれたものになっていることがわかる。とはい
え、戯曲のままだからこれも『瑞士建国誌』と
は関係がない。

以上いくつかの関連書籍を見た。いずれも
『瑞士建国誌』の底本ではなかった。底本探索
は振り出しにもどった。別の方面から探る以外
に方法がない。 四

【注】

- 1) 徐黎明も同じく上海図書館所蔵本を見たという。刊
年を1902年とするが根拠を示さない。奥付があるか
どうかについても明確に説明していない。318頁
- 2) 馮自由「鄭貫公事略」82-85頁『革命逸史』初集 商
務印書館1939. 6/1945. 2重慶第二版/1945. 12上海初
版

【参考文献】

- シラー作、桜井政隆、桜井国隆訳『ヴィルヘルム・テル』
岩波文庫、1929. 2. 5/1984. 4. 5二十五刷
- 木村毅、齋藤昌三『西洋文学翻訳年表』岩波書店
1933. 7. 5。岩波講座世界文学
- 柳田 泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5
巻 春秋社1961. 9. 15/1966. 3. 10二刷
- 柳田 泉「政治小説年表」『政治小説研究』下 明治文
学研究第10巻 春秋社1968. 12. 25
- 吉武好隆「第四章 葦田東雄(半窓睡山)の翻案作品」

- 『近代文学の中の西欧』教育出版センター1974. 11. 5
比較文学研究叢書1
- 宮下啓三『ウィリアム・テル伝説——ある英雄の虚実』
NHKブックス348。1979. 7. 20
- 井澤睿子「齋藤鉄太郎訳「瑞正独立の弓弦」について」
『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第12
号 1991. 3. 31
- 谷川道子「ドイツ文学」原卓也、西永良成編『翻訳百年
——外国文学と日本の近代』大修館書店2000. 2. 10
- 藤田保幸「広義翻訳作品としての葦田東雄『字血句涙・
回天之弦声』の性格」『表現研究』第74号
2001. 10. 31
- feimeng「歩武瑞士、肇建新邦——鄭貫公与《瑞士建国
誌》」ウェブ「水木社区」2005. 9. 26。注：これにあ
るシラー戯曲との比較を削除したものが羅衍軍論文
らしい。
- 羅 衍軍「歩武瑞士 肇建新邦——鄭貫公与《瑞士建国
誌》」『文教資料』2008年6月号下旬刊 2008. 6. 25
- 武禧(劉徳隆)「零七三 鄭哲」『晚清小説作者掃描
(15)』『清末小説から』第90号2008. 7. 1
- 徐 黎明「翻訳・政治・政治小説——略論《瑞士建国
誌》在東亞的翻譯与伝播」『翻訳史研究』2015 上
海・復旦大学出版社2015. 12

李伯元死後のこと(下)

—『繡像小説』発行遅延との関係

樽本照雄

劉霞のばあい

劉霞論文は、題名のとおりに「文明小史」の刊行時間に問題を絞っている。該作品を掲載した『繡像小説』の発行遅延に関心を抱いたのは当然だった。

先行研究について次の名前を掲げる。張純、陳大康、文迎霞、および日本の樽本だ。

劉霞は、名前を出しただけ。関連する論文名が参考文献にあげてあるが全部というにはほど遠い。また、この論文では問題提起と論争の経過についても説明していない。別の論文^{*10}も見たが言及はごくわずかだ。劉霞は前述王学鈞「李伯元研究資料篇目索引」を見ている。しかし、そこに収集された詳細な論文群は入手できなかったらしい。具体的な引用がないからわかる。現代中国では論争の経過について詳細がすでに不明になっていることを示している。劉霞の碩士論文を読んでそう感じた。

○論争の経緯

樽本の名前があがっているから論争の当事者のひとりとして私が経緯を簡単に説明する。

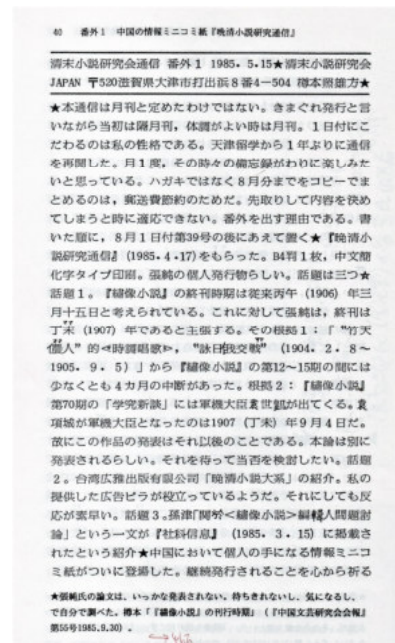
『繡像小説』の発行が遅延していたことを最初に指摘したのは、張純『晚清小説研究通信』(1985. 4. 17)である。

張純は、『繡像小説』第15期に掲載された日

露戦争を詠んだ歌に着目した。第15期は、陰暦十一月初一日に発行されたことになっている。ところが日露開戦は、陰暦十二月二十三日(宣戦布告は同月二十五日)だ。張純はそこに時間のズレがあることを発見した。十二月の日露開戦をそれ以前の十一月に書くことはできない。『繡像小説』は考えられていた月日より遅れて発行されたのではないかと考えた。

張純のすぐれた点は、掲載された作品の内容に注目したところだ。内部から検討することによって雑誌発行の遅延を証明した。それまで誰も気づかなかった。鋭い感覚であったと私は高く評価する。『繡像小説』発行遅延説を最初に提出した功績は張純にある。研究者はだれでも認めるだろう。

結論として『繡像小説』の終刊は光緒三十三年丁未(1907)九月であると張純は断定した。その根拠も作品に描かれた事柄である。『繡像小説』第15期ではその方法が成功している。成功体験があるから張純は最後まで作品内部からの探索にこだわった。それ以外に発行遅延説を証明する方法があることを認めようとはしなかったのだ(後述)。



樽本『清末小説きまぐれ通信』1986所収

最初に反応したのは樽本「中国の情報ミニコミ紙『晚清小説研究通信』」(『清末小説きまぐれ通信』番外1 1985. 5. 15)だ。張純の新しい指摘を紹介した。

一方で私は独自の検証方法を模索する。張純とは異なる方向から接近し証明する方法はないだろうか考えた。資料に裏付けられ、より確実に説得力のある方法だ。いわば外部からの接触である。

私はそれ以前に「繡像小説総目録」(1973)を編集公表していた。そのほかの雑誌についても総目録作成の作業を継続中だった。また新聞(天津)『大公報』、雑誌『東方雑誌』(商務印書館)も調べた。それらには『繡像小説』が天津に届いたという記事、あるいは商務印書館の出版広告が掲載されているばあいがある。それを思い出した。特に新聞であれば日付のついた資料として利用できると思ったのだ。参考までにいえば、新聞雑誌に掲載された記事、広告に注目する研究者は当時誰もいなかった。後で述べるように新聞を資料として使用することに反対した人もいたのだ。

その頃は日本で手に取ることのできる新聞影印本、雑誌は限られていた。多くの影印本がある現在からは想像できないだろう。『同文滬報』などを追加し調査結果をとりあえず発表したのが樽本「『繡像小説』の刊行時期」(『中国文芸研究会会報』第55号 1985. 9. 30)である。

そこから本稿に関係する部分のみを抜き書き。説明を少し加えた。重要なのは、李伯元の死後も『繡像小説』は継続刊行されている事実が引き起こす影響だ。

1 『繡像小説』は従来考えられていた光緒三十二年三月より約十ヵ月遅れて同年末に終刊した。(発行遅延)

2 「文明小史」第54回以降と「活地獄」第24回以降の南亭亭長は李伯元ではなくなる。(筆名、代作)

3 李伯元と劉鉄雲の盗用関係は、一部が成立しない。「文明小史」第59回が「老残遊記」の原稿第11回を盗用したとき、李伯元はすでに死亡しているからだ。(盗用)

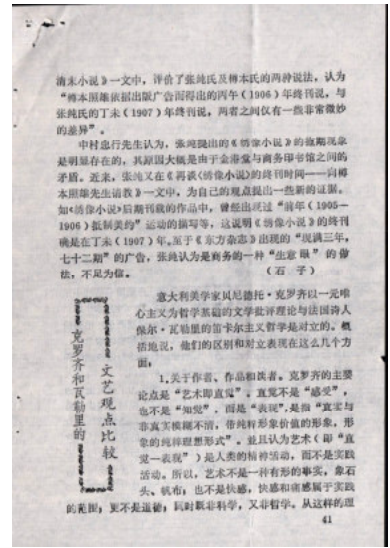
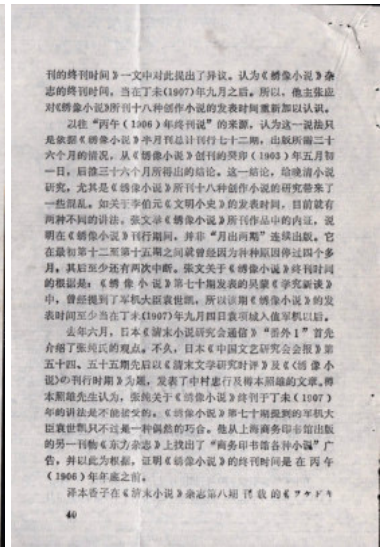
4 『月月小説』第3号(光緒三十二年十一月望日)に吳趼人が書きたいわゆる「李伯元小伝」が掲載された。李伯元の死後七ヵ月後に執筆したとある。わざわざ『月月小説』第3号を選んだ理由はなにか。「町の商人のなかには、他人が書いた小説を君(注:李伯元)の名前で出版するものささいる[坊賈甚有以他人所撰之小説。假君名以出版者]」吳趼人が繭叟の筆名で「活地獄」を『繡像小説』に掲載したのとはほぼ同時期である。その意味は、李伯元の死後も彼の名前を利用している『繡像小説』と金港堂、ひいては商務印書館に対する吳趼人の抗議である。李伯元の代作をしていたのは歐陽鉅源しか考えられない。(吳趼人による批判、代作)

ほぼ30年前の文章だ。しかし、上につけ加えるべき事項は、なにもない。発行遅延、筆名、代作、盗用、吳趼人による批判。今から言えばこの論文は存在する問題点のすべてを明らかにしている。

張純が予告していた論文の正式発表はかなり遅れた。張純「關於《繡像小説》半月刊的終刊時間」(『徐州師範學院學報(哲學社會科學版)』1986年2期 1986. 6. 15)である。内容は以前の指摘と変わらない。學術誌に掲載されたから研究者はこちらに言及するのが普通だ。

問題提起と討論の経過を簡潔にしかも同時期に紹介した次の文章がある。石子「關於《繡像小説》終刊時間的討論」(江蘇省社會科學聯合會編『社科信息』第6期1986)。これに触れた文章をあまり見ない。写真を掲げておく。

雑誌の終刊時期について張純と樽本の意見は一致しなかった。張純は光緒三十三年丁未(1907)九月を主張し、私は光緒三十二年年末だと断定したからだ。



○資料としての新聞広告

私が新聞雑誌を資料として使用したことについて張純から批判があった。商務印書館が商売のために掲載している広告だから信用できない[是商務的一種〇生意眼〇的作法, 不足為信]。「生意眼」すなわち日本語で「商売(ビジネス)目線」というのは、金儲けを最優先することという。金儲けのための広告だからでたらめを書いている、信用できない、と張純はいう。

張純は誤解をしている。書籍を売るために内容を好意的に誇張して宣伝することはあるだろう。これが「商売目線」だ。しかし、『繡像小説』第〇期を刊行したという告知についてどう書けばでたらめになるのだろうか。予告であれば時間の誤差が生じることがあるかもしれない。しかし刊行広告だ。実際に出版されていると考えていい。日付を明示する新聞だからこそ資料的価値がある。

私がくり返してこのことを書くのには理由があるのだ。内容はでたらめだ、信用することはできない。当時これが広告に関する中国人研究者の一般的認識だった。

私が「一般的認識」だという根拠を示そう。

あらためていうまでもなく清末時期文芸のひとつの特徴は、その頃陸続と刊行された小説専

門雑誌の存在だ。当時日本では雑誌の原物をまとめて所蔵する公的機関はほとんどなかった。小説総目録を作成するために私はそれらを求めて日本国内の図書館を巡るほかなかった。

1980年代になってから清末小説雑誌の影印本が出版された。『新小説』『繡像小説』『月月小説』『小説林』などだ。特に『新小説』はほんの一部しか目にするのができなかったから全24冊の出現は貴重だった。これらの影印本は、資料の空白を埋めてくれる。清末小説研究にどれくらい役立つ出版物であるかはいうまでもない。中国で清末小説雑誌研究の専門論文が出現するのは影印本刊行以後だといっている。

これほど貴重で重要な影印本であるにもかかわらず信じられない編集方針をとった。雑誌に掲載されている広告をすべて削除したのだ。これでは影印本を作る意味が半減する。担当した編集者にとって広告は資料的価値のないものだったことがこれで理解できる。それにしても影印本作りには研究者が協力していたはずだが、削除に反対しなかったのだろうか。結果を見れば研究者も広告を必要としなかったと考えざるをえない。だからこそ「一般的認識」だという。

張純は作品内部から『繡像小説』の刊行年月を探索するというやり方にあくまでもこだわった。だがその後文章を発表しなくなる。調査に

行き詰まったのだろう。私が提案した出版広告を調べるという方法を「信用できない」と排除した結果だと考える。新聞記事、刊行広告を利用するやり方は、のちの文迎霞、陳大康、劉霞、王文君ら*11全員が採用している。研究方法として有効であるという認識が共有されたとわかる。

○劉霞の広告調査

劉霞は『新聞報』と『中外日報』の出版広告を調査した。「文明小史」の連載時期を探索するための基本資料である。ただし『申報』を調査対象にしなかった理由は知らない。劉霞の文章からいくつかを引用して私が補足説明する。

[劉霞] (注: 「文明小史」第60回は、『繡像小説』第56期に掲載された) 半月刊であれば第56期の『繡像小説』は光緒三十一年七月十五日(1905年8月15日)に連載が終わっていなければならない。ところが『新聞報』七月の広告によれば「上海商務印書館『繡像小説』は第39、40期を出版した」とあるだけ。この時『繡像小説』は第40期を発行しただけだとわかる。「文明小史」は第44回を連載してまだ完結していない。

按照半月刊的發行, 第五十六期《繡像小説》應該在光緒三十一年七月十五日連載結束, 但是依據《新聞報》七月的廣告, 只有一則“上海商務印書館《繡像小説》第三十九、四十期已出”。可以看出此時《繡像小説》只發行到第四十期, 而《文明小史》連載到四十四回, 並沒有完結。

『繡像小説』の発行が今までの予想より遅れている事実を新聞広告によって確認している。すでに明らかにされていることだ。

そして次の発言につながる。

[劉霞] この広告は、薛正興、阿英のいう

「文明小史」は光緒三十一年九月に完成したという説明が完全に間違っていることを証明している。

這則廣告證明了薛正興、阿英說的《文明小史》完結於光緒三十一年九月的說法是完全錯誤的。

ここで劉霞は薛正興という名前しか出してはいない。補足すれば薛正興「前言」(1997)*12である。「前言」と称しているとお概説だ。「文明小史」の掲載状況を次のように説明する。

[薛正興5頁] (注: 文明小史は) 光緒二十九年(1903年)五月より光緒三十一年(1905年)九月まで『繡像小説』半月刊に連載された。

從光緒二十九年(1903年)五月到光緒三十一年(1905年)九月, 在《繡像小説》半月刊連載」

薛正興は「九月」と書いているがこれは書くとなれば「七月」でなくてはならない。劉霞が「九月」としたのは書いてあるまを引用したからなのだろう。しかし誤記だから注記する必要があった。

○魏紹昌から薛正興へ

薛正興が『繡像小説』第56期(「文明小史」第60回)を「光緒三十一年九月」と誤って書いたのには典拠がある。魏紹昌編『李伯元研究資料』(1980)*13だ。

[魏紹昌122頁] 『繡像小説』半月刊第1号から56号は一九〇三年五月から一九〇五年九月まで出版された。

連載於《繡像小説》半月刊第一号至第五十六号, 一九〇三年五月至一九〇五年九月出版。

『繡像小説』発行遅延説が提起される前の説明だ。阿英説を信じきって記述したからそうなる。それにしても魏紹昌は七月とすべき箇所をなぜ九月と誤記したのか。勘違いだろうが不思議なことだ。

解説すると「一九〇三年五月」というのは典型的な新暦旧暦混用だから注意してほしい。一九〇三年は新暦を示し五月は旧暦を表わす。清末までは旧暦だから混用しても間違いではない。しかし、まぎらわしいのは確かだ。この新暦旧暦混用は中国学界においては現在でも見かける表記法になっている。

くり返すが、雑誌発行を九月とするのは魏紹昌の勘違い。書くならば七月である。薛正興は、疑問を感じることなく間違いを引用した。先行論文の誤った記述を誤ったまま引用する例である。

こう見てくると劉霞が薛正興とならべてあげた阿英は不適切だとわかる。魏紹昌にしたほうがよい。



○基本的共通認識か
次の説明は理解しにくい。

【劉霞】 学术界の多くの学者にはすでに基本的共通認識となっているが、「文明小史」は確かに「老残遊記」から部分的に盗

用しておりそれは欧陽鉅源がやったことに違いない。

学術界的許多学者已基本達成共識，《文明小史》確實是抄襲了《老殘遊記》部分文字，而且應該是歐陽鉅源所為。

ここは包天笑による証言に少し関連する。よく知られた事実だ。李伯元の原稿「文明小史」には欧陽鉅源による書き込みがあった〔若「文明小史」等，則我曾見過原稿，確有鉅源的筆墨在內咧〕*14。欧陽鉅源の名前が出てくるところが重要だ。欧陽と親しかった包天笑だからこそ記述ができた。ただし、「文明小史」と劉鉄雲「老残遊記」の盗用関係については言及していない。そもそも劉鉄雲自身が盗用されたことを知らなかった。だから息子の劉大紳は「關於老残遊記」（1939）を執筆したがそのことに触れない。孫の劉厚沢、劉蕙孫兄弟、曾孫の劉德隆も盗用事件を説明しない。もしかしたらわざと知らないふりをしているのかとも思う。

言っておかなければならない。盗用問題が出てきたのは『繡像小説』発行遅延が発見される以前の事だ。盗用を指摘した魏紹昌は、李伯元と劉鉄雲の問題だと個人名を前面に掲げていた。李伯元自身が劉鉄雲の原稿から一部を無断借用した（後述）。『繡像小説』は半月刊を守っており李伯元は「文明小史」を完結させたとな誰もが信じていたころだからそうなる。

問題が存在することを指摘したのは表面上は魏紹昌が最初だった。彼は阿英の名前に言及せず盗用があることを公表した（魏紹昌「李伯元与劉鉄雲の一段文字案」『光明日報』1961. 3. 25）。題名を見ればわかるように李伯元と劉鉄雲の個人間に発生した事件だと考えられていた。盗用の事実は両作品を比較対照すれば理解できる。だが、魏紹昌自身、解決できないことが3点あると述べた。そのうちのひとつは、李伯元が自ら没書にした原稿からなぜ一部を盗用して自作の「文明小史」に再度使用したのか。つまり、

他人の原稿を没書にした本人が、それを自分の作品に再度取り込んだ(盗用した)という不可解な行動に疑問を呈した。李伯元ひとりだけの問題だと考えるかぎり、その理由は説明できない。魏紹昌は解決不可能だと最初から放置した。

ところが前述のとおり1980年代に李伯元の死去した後も『繡像小説』は発行されていたことが証明された。筆名南亭亭長は李伯元ひとりに固定したものではなくなる。

私は盗用問題については人名ではなく作品名を出すことにしている。そのほうが実態を反映すると考えるからだ(後述)。

劉霞の上の説明は基本的に正しいように思う。だが、説明が不足している。私は疑問を感じる。劉霞は学術界で多くの学者の基本認識になっているというが、本当にそうなのか。盗用関係は両作品だと提起し、欧陽鉅源の名前を出したのは樽本以外に誰がいたのか思い出さないからだ。前出『中国文芸研究会会報』第55号(1985)のほかにも別の研究者が同じような指摘をしたのだろうか。ここらあたりは記憶があやふやだ。当時は研究者からの反応がまったくなかった。だからこそ私は盗用問題を何度も提起したのだ。そういう状況であったにもかかわらず劉霞は「基本的共通認識となっている」と説明する。おかしいことだと思った。

読めば劉霞の碩士論文4頁は張純「再説李伯元与劉鉄雲の文字案」を紹介している。ただしどこで発表したのか記載がない。また参考文献にも収録しない。

たどると袁健、鄭栄編著『晚清小説研究概説』(天津教育出版社1989. 7、166頁)が比較的詳しく記述している。

張純「再説李伯元与劉鉄雲の文字案」(全国第3届「中国近代文学学術討論会」1986. 10発表。未見)だそうだ。学会で発表配布した論文らしい。それ以後、刊行物には収録していないから私は読んでいない。

その紹介によると、張純はいわゆる「李伯元

与劉鉄雲文字案」は成立しないと主張する。李伯元死後だから、1. 李の親友でなくてはならない。2. 『繡像小説』の編集に参加した人物でなくてはならない。3. 李伯元の作風に似ていてなくてはならない。この3条件を満たすのは欧陽鉅[鉅]源しかないという。

李伯元と劉鉄雲の人名ではなく作品名を使うべきだというのは私の主張とほぼ一致する。また、欧陽鉅源を出すところはまったく同じだ。『晚清小説研究概説』の該当箇所は昔に私は読んでいる。同じことを言っていると思って、そのまま忘れてしまったらしい。

なるほど劉霞が、すでに共通認識になっているというのはここらあたりを指すのかもしれない。

○盗用問題

前述のとおり李伯元の「文明小史」には欧陽鉅源の筆が入っていたという包天笑の証言があった。具体的な例をあげているわけではない。しかし、李伯元死後に発表された「文明小史」第57回以降は書き入れどころか欧陽鉅源の代作であるだろう。その代作「文明小史」第59回には劉鉄雲「老殘遊記」原稿第11回から「北拳南革」部分を盗用しているという事実がある。

李伯元が存命中であればどうか。劉鉄雲「老殘遊記」原稿第11回を没書にしてその前後を書き換えたというのはたぶん李伯元の仕業であろう。作品の掲載を決定する権限を持つのは雑誌の主編だと考えるからだ。ただし、欧陽鉅源が関係していたという推測も否定はできない。証拠がないだけ。没書にしたのが李伯元であり、後に原稿から盗用したのが欧陽鉅源だというのが理解しやすい。

「北拳南革」以外にも小さな盗用の事実が見える。

「文明小史」と「老殘遊記」の盗用問題を論じたのは魏紹昌だけではない。その直後に発表された太田辰夫「「文明小史」をめぐって」(『神

戸外大論叢』第12巻第3号 1961. 8. 30) がある。

太田は「面白い表現を借りている」(107頁)と指摘する。「恃強拒捕的肘子」「臣心如水的湯」だ。鍋物に入れる食材とスープについて冗談めかして説明した箇所だ。

これが以下の順序で共通する。

「老残遊記」第11回(実際は第12回)
第16期 刊年不記、推定光緒三十年四月
「文明小史」第49回 第45期 刊年不記、
推定光緒三十一年十一月

「老残遊記」が「文明小史」に先行する。発表時間から見ても無断借用したのは後者の「文明小史」である。わずかな語句だから「文明小史」につけ加えたのは欧陽鉅源だったといってもおかしくはない。上記のふたつは普通の表現だから盗用ではない、という汪家熔がいた。では「老残遊記」以外のどの作品に見えるのか、と質問すると返答がなかった。反論するためにだけ反論したらしい。

別の例を見る。

李伯元の「文明小史」第56回の閱兵(軍事演習)を描いた700字前後の部分は、憂患余生(連夢青)「鄰女語」第5回から盗用したものだという。陳平原、李丹らの指摘^{*15}である。ともに『繡像小説』に掲載された。連夢青は劉鉄雲の「老残遊記」原稿を『繡像小説』に紹介した人物だ。ふたりは親しかった。その「鄰女語」からも「文明小史」は盗用していたという。以下のとおり。

「鄰女語」第5回(第10期 光緒二十九年八月十五日) []は上海文化出版社1957. 7

「文明小史」第56回(第52期 刊年不記、推定光緒三十二年正月/李伯元は存命。二月十五日に肺病宣言)

両作品の該当部分を3分割して引用する。作

品名の前後につけた番号はそれぞれが対応していることを示す。ただし、2については「鄰女語」にはなくて「文明小史」のみにある。つまり「文明小史」2は独自の描写になっている。語句の似た箇所には青色で印をつけた。

1 ● 「鄰女語」

……等到那日袁軍操練行軍之日。不磨易了服色。照着行軍觀陣之例。袖上繫了紅十字的記号。主僕二人。問明道路。一直望城外行軍戰場進發。未到戰場之時。偶見衆將官擁着山東巡撫袁世凱。坐在馬上。身着行[戎]裝。頭戴紅頂。赫赫威風。果然是一員大將的形式。手下衆將官。却[×]都換了行軍樣式冠服。却没有一個服這古時武裝的。前頭打着帥字黃旗。引著袁世凱飛奔而去。等到袁世凱到了操場官廳之時。那邊預備的兵將。大家望地下一齊跪倒口稱迎接大帥。衆声如雷。隆隆震耳。袁世凱下馬入座。座上公案。紅綠相間。儼然一衙門旧式。衆將官捧上冊籍圖画。袁世凱略一展看。使命開操。衆將官皦然聞命。各尋自己馬匹。各歸隊伍去了。袁世凱遂入内更衣。也換了短衣包頭而出。袖上双龍金線。却有十三道明記。映著日光。格外閃爍[爍]耀目。遂伝令請各国教習。一同策馬往来。

1 ● 「文明小史」

大操那日。天剛剛亮。方制台騎着馬。帶着衛隊。到了主營。各營隊官隊長。按礼參了堂。外面軍樂部。奏起軍樂。掌着喇叭。打着鼓。应絃合節。方制台換過衣服。穿了馬褂。袖上一條一條的金線。共有十三條。腰裏佩着指揮刀。騎着馬。出得主營。揀了一塊高原。望得見四面的。立起三軍司命的大旗子。底下什麼營什麼營分為兩排。都有嚴陣以待的光景。兩面奏起軍樂。

軍事演習の日、「鄰女語」では袁世凱が、「文明小史」では方制台が現場に到着する。細かい部分は違うが内容は大筋ではほぼ一致する。

「鄰女語」1は主人公が観覧するとき袖に赤十字の記号をつける[袖上繫了紅十字的記号]。すこし離れた「文明小史」2に同様の記述[身上都釘着紅十字的記号]がある。これが単なる

赤い記号なのか、そのまま赤十字印なのかはわからない。ただし、紅十字といえば普通は赤十字印だと考えられるから観戦者が表示するのは奇妙な感じをうける。袖に金筋が13本という表記も「双龍」を除けばほぼ同じだ〔袖上双龍金線。却有十三道明記/袖子上一條一條的金線。共有十三條〕。方制台が四方を見渡せる場所を選んだ〔揀了一塊高原〕。これは「文明小史」3の主人公と召使いが観戦するのに最も高い場所を選んだ〔揀了一塊最高地方〕と共通している。

以上は「鄰女語」の描写を「文明小史」が簡略化して取り入れたとすることができるだろう。ところが、次の箇所はもとの「鄰女語」にはなくて「文明小史」が加筆した部分だ。

2●「鄰女語」 文章なし

2●「文明小史」

洋教習一馬當先。喊着德国操の口令。但聽見那洋教習控着馬。高声喊道。安特利特。這安特利特是站隊。兩邊一齊排了開來。洋教習又喊阿格令斯。阿格令斯是望左看。兩邊隊伍一齊轉身向左。洋教習又喊阿格來斯。阿格來斯是望右看。兩邊隊伍。又一邊轉身向右。洋教習又喊阿格克道斯。阿格克道斯是望前看。兩邊隊伍又一齊向前。行列十分整肅。步伐十分齊整。方制台看了。只是拈髯微笑。洋教習又喊勿六阿夫。勿六阿夫是。把槍擗在肩上。兩邊隊伍一齊把槍擗在肩上。洋教習又喊勿六阿澆。勿六阿澆。是把槍立在地上。兩邊隊伍。一齊把槍立在地上。洋教習又喊勿六挨赫篤白蘭山西有。勿六挨赫篤白蘭山西有。是用兩手抱槍。兩邊軍隊。一齊兩手抱着槍。洋教習演習口令。便退至陣後。這時閱操的各國公使署代表人。各國領事館代表人。跟着參贊書記。以及中國各省督撫派來的道府。余日本也在內。身上都釘着紅十字的記号。東面一簇。西面一圍。

外国人教官が洋式軍隊の基本動作をドイツ語で命令する場面だ。ドイツ語らしきものが音訳されている。ただし、その表記が説明と一致しない箇所がある。たとえば「左向け左」と書き

ながら実際の行動は「回れ左」である。

それらを一覧にする。ネットなどの説明によりながら訳語とドイツ語を掲げるが正確ではないかもしれない。

安特利特 Antreten アントレーテン 整列
 阿格令斯 左向け左。動作説明は回れ左。造語：Augen Links アウゲン・リンクス
 阿格來斯 右向け右。動作説明は回れ右（ドイツ軍は右回りはなく左回り）。造語：Augen Rechts アウゲン・レヒツ
 阿格克道斯 Augen Gerade-Aus アウゲン・グラードアウス かしら中
 勿六阿夫 Gewehr u:}ber ゲヴェーア・ユーバー 担え銃
 勿六阿澆 Gewehr ab ゲヴェーア・アブ 立て銃
 勿六挨赫篤白蘭山西有 捧げ銃 造語：Gewehr Achtung, Präsentiert ゲヴェーア・アハトゥング・プレゼンティエート

ドイツ軍は右回りはなく左回りだそうだ。すると「回れ右」と説明するのは間違いとなる。

阿格（アウゲン）は視線、勿六（ゲヴェーア）は銃を意味するだろうと推測する。上海租界にいるドイツ人から聞いたのかもしれない。漢字の一部が共通した配列になっているところを見る。造語ではなかろうか。既存の単語をもとにして漢語風に作ったようだ。

「鄰女語」にはもともと存在しない場面である。ドイツ式というのを強調したかったのかもかもしれない。だが、これから甲軍（營）と乙軍（營）が戦う軍事演習がはじまるという時刻だ。広大な空間が目の前に広がっているのが「鄰女語」の場所設定になっている。それに対して軍隊の基本教練を悠長に繰り返すのでは視界が極端に限定される。そぐわない印象がある。

ところが、上に示した両者の挿絵は反対になっている。「鄰女語」の挿絵は基本教練のように見えて空間が狭い。一方の「文明小史」は広い空間の演習場面だ。



「鄰女語」第5回



「文明小史」第56回

挿絵は本文とは別に描かれるものだから完全に一致するわけでもない。だが、似ているようで違うので一言つけ加えた。

考えれば西洋風の軍事演習は珍しい。南亭亭長(李伯元か欧陽鉅源かは不明)はそれだけでは新式軍隊の描写が十分ではないと感じたらしい。唐突に軍事教練をつけ加え、ドイツ人教官にドイツ語を使用させた。それらしい雰囲気を出したつもりか。前後でじっくりとはこないが、南亭亭長は加筆するだけの知識を有していたことがわかる。それとも別の書物、たとえば教練教科書などのようなものから引っぱってきた可能性もあるだろう。

次の戦闘描写が両作品ではほぼ一致する。青色印は前述「文明小史」1の部分と類似していることを示す。両者がほぼ共通するので彩色はしない。

3●「鄰女語」

行軍已分為甲乙二壘。各據一方。遙遙相對。各作相持之狀。不磨主僕遂揀了一塊最高地方。立足觀戰。遠望村民市人。來觀者甚少。不覺太息。中國人竟無尚武的精神。如此盛舉。竟不如看戲人多。忽見甲軍偵探來報。乙軍遣馬兵來襲。甲軍遂準備迎敵。分道埋伏。一齊都蹲著[在]草地墳堆裏等候。等到敵兵馬隊來探。一時伏兵齊起。槍聲如連珠一般。甲軍的大砲

接着轟發。乙軍馬兵勢不能敵。遂反面而奔。甲軍竭力窮追。剛要奪險據要的時候。又忽為敵軍兩面伏兵包抄[抄]。圍困在核心中間。甲軍四面衝突。竟無一絲破綻可尋。兩面砲聲槍聲火藥氣直貫雲霄。正在駭目驚心之時。看看甲軍支持不住。忽聞大聲。發於天際。竟若山崩地裂一般。一股黑氣罩著兩軍陣前。以為甲軍此次必覆滅矣。雖明知是個假的。心裏也不覺代為着急。誰知此聲即是甲軍地雷之暗号。遠見乙軍的主將營盤旁邊。不知何時為甲軍所據。乙軍見主將營盤有失。遂解兩軍鏖戰之圍。分作前後應敵之勢。一軍面向外攻。自行斷後。一軍面向內進。回救主營。甲軍進據敵地。正欲奪取敵營。以為滅此朝食之計。不防前面敵兵反攻。立時人馬紛亂。調運不齊。只好分作兩支。暫守掃路。那乙軍的主將見自家兵隊回護。敵兵漸退。抖擻精神。搖動旗鼓。一齊出攻。洶湧之勢。銳不可當。當先進據敵營的兩支兵馬。深恐兵單不敵。遂各向自己軍隊奔去。合做一堆。併力抵禦。乙軍再四猛攻。竟不可破。甲軍亦連發數隊。作救應之狀。將要得手之際。忽為乙軍軍馬隊所衝。頃刻分為兩翼。各不相救。甲軍援兵遂揮動令旗。令各軍退據高岡。憑高望險而守。乙軍仰攻不及。反為甲軍所擊。遂大敗而回。袁世凱遂命鳴金收軍。重複到了官廳。伝令賞賚記功。諸事已畢。遂一路呼喝回營。

3●「文明小史」

說時遲。那時快。兩邊行軍隊伍。已分為甲乙二壘。大家占着一塊地面。作遙遙相對之勢。忽然甲營裏有一騎偵探來報。說是乙營已遣馬兵來襲。甲營預備迎敵。分道埋伏。一箇箇都蹲在樹林裏。草堆里。寂靜無聲。等到乙營馬兵撲過來。甲營埋伏尽起。槍聲如連珠一般。當中夾着大砲。轟天震響。乙營看看不敵。伝令退出。甲營趁勢追趕。追趕不到兩三節路。誰知被乙營的接應。包抄上來。困在核心。甲營左衝右突。竟無出路。兩面槍砲聲。上震雲霄。四面都是火藥氣。有兩位年紀大点的道府。一箇箇都打惡心。甲營正在支持不住。忽然天崩地塌一響。黑煙成團結塊。眯得人眼睛睜不開。大家以為甲營一定全軍覆沒了。雖是假的。看的人也覺得寒心。誰知這一響是甲營地雷的暗号。一響過了。黑煙漸完。乙營已不曉得什麼時候。被甲營占了去了。乙營見自己主營有失。把圍登時解了。分作兩隊。作前後應敵之勢。一隊向外邊打。自行斷後。一隊向裏邊打。回救主營。甲營剛剛據了乙

營。正打算遣馬兵守住路口。及至看見乙營已經回來了。一時措手不及。只得把兵分為兩隊。守住路口。乙營主將。看見甲營沒有什麼預備。就搖旗吶喊。撲將過來。甲營兩隊兵。覺得自己太單弱了。各向自己軍隊奔去。合做一大股。竭力抵禦。乙營再三猛撲。甲營毫不動搖。甲營又在一大股裏。分出兩小股。作為接應。將要得手。忽被乙營馬兵衝散。頃刻之間。化為兩截。首尾各不相顧。甲營主將指揮自己軍隊。退守高原。乙營仰攻不及。反為甲營所擊。大敗而回。方制台傳令收兵。一片鑼聲。甲乙兩營。俱各撤隊。這時也有下午四点多鐘了。方制台依旧騎着馬。下了高原。前呼後擁的回轉衙門。

乙軍の攻撃を甲軍が迎え撃つ。一方的な劣勢に追い込まれそのまま全滅するかと見えた。ところが、いつのまにか乙軍の本陣が奪われ激しい攻防戦が展開する。この軍事演習の場面は約700字である。

両者はなによりも大筋が同じだ。語句は共通する部分が多い。先行する「鄰女語」から後の「文明小史」が無断借用したことは明らかだ。

上に見る「文明小史」第56回(第52期)は、刊年不記であるが新聞広告によれば光緒三十二年正月出版が推定される。

この光緒三十二年正月というのが李伯元にとってはきわめて微妙な時期なのだ。

李伯元は存命しているが肺をわずらっていた。ついに二月十五日に肺病宣言を行なった。死去はその約一ヵ月後の三月十四日である。

李伯元の肺病宣言から上の「文明小史」盗用問題を少し考える。

○李伯元の肺病宣言

光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文「告我良朋」が南亭の署名で掲げられた。南亭、すなわち李伯元が肺病のためその年の正月から招宴はすべて謝絶しているという内容だ^{*16}。

この正月というのが上の「文明小史」第56回(第52期)と重なる。肺病に苦しみながらの原稿執筆は無理ではなかろうか。そう考えればや

はり有力な協力者欧陽鉅源の存在は無視できない。軍事演習場面を以前の「鄰女語」から拝借し、新しく教練部分を書き加えたのは欧陽鉅源である可能性があらためて浮上する。

○「文明小史」第59回

[劉霞] ……「文明小史」の第59回は確かに李伯元の死後に発行された。

……《文明小史》の第五十九回、確實は李伯元死後発行的。

劉霞は根拠として『新聞報』六月初三日付、『中外日報』六月初二日付を示す。ただし、王文君と文娟は『申報』閏四月初九日掲載の広告をあげている。うしろの「『繡像小説』刊行一覽(部分)」をご覧いただきたい。いずれにしても李伯元の死後であることには変わりがない。

[劉霞] 結局のところ「文明小史」の発行時間は1903年5月27日(光緒二十九年癸卯五月初一)にはじまり、遅くとも1906年7月22日(光緒三十二年丙午六月初二)までになる。

綜上所述、《文明小史》的発行時間起於1903年5月27日(光緒二十九年癸卯五月初一)、最遲止於1906年7月22日(光緒三十二年丙午六月初二)。

劉霞は問題を「文明小史」に絞っている。別の作品「活地獄」ほかについては検討対象にしない。それはそれでひとつのやり方だ。

劉霞が「文明小史」の著者について説明しているのは例外だといってい。なぜなら文迎霞、陳大康、王文君らは『繡像小説』の発行遅延と作品の関係を考えようとはしなかったからだ。

李伯元死後の影響

確認するために述べておきたい。

李伯元死後に刊行された『繡像小説』には次の3作品がある。

南亭亭長「文明小史」第57-60回、南亭亭長「活地獄」第27-39回、謳歌変俗人「醒世縁」第12-14回。

従来は南亭亭長、謳歌変俗人ともに李伯元だと考えられてきた。しかし、作品は李伯元死後も公表されている。別人の続作だとせざるをえない。すると欧陽鉅源以外には該当する人物はいないのだ。これが私の一貫した考えである。

以前から言っているが「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係も再考の必要がある。

前述の魏紹昌が提出した解決不能の問題はどうか。ひとつは原稿を没書にした本人が、その原稿から一部分を盗用するという矛盾だ。

劉鉄雲「老残遊記」第11回は李伯元により没書にされた。その原稿から一部を無断借用(盗用)した「文明小史」第59回は『繡像小説』第55期の掲載だ。該誌第55期は『申報』三十二年閏四月初九日の出版広告に見える。李伯元死後の約二ヵ月近くが経過している。死者は原稿を書くことも盗用することもできない。李伯元は原稿を書きためていたという研究者がいる。もし生前の原稿があったのであれば、なぜ『繡像小説』の刊行に空白期間が生じたのか。説明できない。刊行の空白は李伯元の原稿がなかったことを証明している。

大きな盗用は李伯元死後の事件である。すると李伯元ではない別人が無断借用した。李伯元が劉鉄雲原稿を没書にし、別人が再利用する。そうであれば魏紹昌が提出した疑問は氷解する。盗用したのは李伯元の後継者欧陽鉅源である。李伯元と行動を共にし原稿に手を入れていたのが欧陽鉅源だ。彼以外に代作をする人物を思いつかない。しかし、署名は南亭亭長のままで変更していない。

雑誌終刊の第72期まで作者名である南亭亭長を維持し前面に押し出し続けたのであればそういう編集方針だったと理解できる。

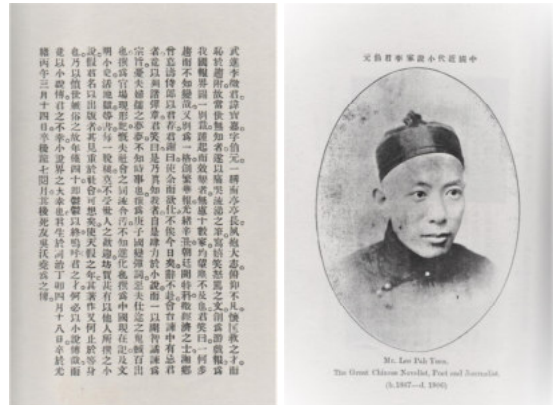
ところが、南亭亭長を別人に差し替えて連載を継続した「活地獄」がある。続作者のふたりとは、第40-42回(第70-71期)の繭叟(吳趸人、沃堯)、第43回(第72期)の茂苑惜秋生(欧陽鉅源)である。

『繡像小説』第70-72期は光緒三十二年十二月中に発行された。なぜこれだけ李伯元ではない著者が登場するのか。

ひとつの手がかりは『月月小説』第1年第3号(光緒三十二年十一月十五日)に掲載されているいわゆる「李伯元小伝」だ。李伯元肖像写真は「中国近代小説家李君伯元」と題されている。次ページに吳趸人が小伝を書いた。題名がないから「李伯元小伝」と称している。

最後部分に李伯元の生卒年月日が明記してある。次のとおり。「君生於同治丁卯四月十八日。卒於光緒丙午三月十四日。卒後踰七閏月。其後死友吳沃堯為之伝」

李伯元の死去を「三月十四日」と日にちまで



『月月小説』第1年第3号

書くのは、すべて吳趸人によるこの記述を根拠としている。

吳趸人は「李伯元小伝」を李伯元死後七ヵ月を経て書いたとある。同年三月から七ヵ月(閏四月を含む)であれば九月だ。『月月小説』の創刊が同じ九月だから掲載しようと思えばできた。該誌第2号でも同様だ。だが実際に掲載されたのは第3号である。時間順に配置すると以

下ようになる。これに『文明小史』の刊行を挿入して示す(編年史の該当ページも記入した)。

光緒三十二年九月十五日『月月小説』第1年第1号

[編年③1094]

○丙午十月初九日(1906. 11. 24) 著者無記名『文明小史』上海・商務印書館[編年③1114]

光緒三十二年十月十五日『月月小説』第1年第2号

[編年③1115]

光緒三十二年十一月十五日「李伯元小伝」『月月小説』第1年第3号[編年③1136]『中外日報』光緒三十二年十一月十六日広告

推定光緒三十二年十二月中『繡像小説』第70-72期(吳趼人、歐陽鉅源)[編年③1160]

前述の『繡像小説』第70-72期(光緒三十二年十二月中)も上に記入した。「李伯元小伝」の後であることにご注目いただきたい。

吳趼人「李伯元小伝」の掲載に『月月小説』第3号を選んだ理由はなにか。そこにもどっていく。

もういちど示す。「町の商人のなかには、他人が書いた小説を君(注:李伯元)の名前で出版するものさえいる[坊賈甚有以他人所撰之小説。假君名以出版者]」

『繡像小説』に連載された南亭亭長の作品に関連するだろう。李伯元死去後の第53期に「文明小史」第57回と「活地獄」第27回の2作品が南亭亭長の名前で掲載されている。「君(注:李伯元)の名前で出版する」の「君の名前」というのは「南亭亭長」ということになる。吳趼人はこの事実を指摘していると考えられる。

この箇所を見ると、やはり「李伯元の死後も彼の名前を利用している『繡像小説』と金港堂、ひいては商務印書館に対する吳趼人の抗議である」。

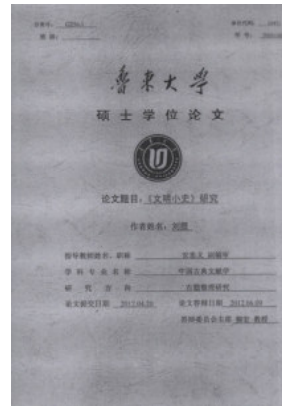
吳趼人にそこまで書かれてしまえば「活地獄」を南亭亭長名のまま続けるわけにはいかな

い。連載中止になっても不思議ではない。だが、どういう理由からか吳趼人が継続執筆した。第40-42回(第70-71期)である。いったん繭叟(吳趼人)の名前に変更してさらに第43回(第72期)は茂苑惜秋生(歐陽鉅源)がつづけた。それでも評者は願雨楼のまま変更はない。

以上の状況を見ると南亭亭長という筆名はやはり筆名であるにすぎないことがわかる。李伯元と歐陽鉅源の共同筆名と考えるのがよい。李伯元の死後も『繡像小説』が継続発行されていたことがその事実を示している。 罎

【注】

- 10) 劉霞『《文明小史》研究』煙台・魯東大学硕士学位論文2012. 4. 20。碩士論文と略す。参考文献に『李伯元全集』をあげるのは当然だ。しかし、『李伯元全集』で代表させるのではなく王学鈞の詳細な「李伯元年譜」は特別に掲載すべきだった。それが適切なあつかいだと考えるからだ。



劉霞碩士論文

なお王瑋子『《繡像小説》研究』(揚州大学碩士論文2003. 5)があることだけを書いておく。

- 11) 次を追加する。

劉穎慧『晚清小説広告研究』北京・人民出版社2014. 9。

謝仁敏『晚清小説低調研究——以宣統朝小説界為中心』北京・中国社会科学出版社2014. 10。

文娟『文学場域变革中的交融共生——掃葉山房説部及雜誌刊行研究』上海大学出版社2015. 11の「附録

4 《申報》所刊雷瑯的謝贈文字」

- 12) 薛正興「前言」薛正興主編『李伯元全集』第5巻
南京・江蘇古籍出版社1997. 12
- 13) 魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980. 12
- 14) 鈞影「清晚四小説家」『小説月報』第2巻第7期(総第19期) 1942. 4. 1/のち「晚清四小説家」とし『李伯元研究資料』1980. 28頁
- 15) 陳平原『二十世紀中国小説史』第1巻(1897年-1916年)(北京大学出版社1989. 12) 85頁の注4。李丹「《文明小史》: 晚清維新歴史的一面鏡子」『四川師範大学学报(社会科学版)』第27巻第5号(総第122期) 2000. 9. 10. 81頁。王燕『晚清小説期刊史論』(長春・吉林人民出版社2002. 11. 428頁) もほぼ同じことを書いているが李丹には触れない。また、劉霞碩士論文5頁は李丹を出して王燕には言及しない。
- 16) 樽本「李伯元の肺病宣言——『繡像小説』発行遅延

に関連して」『清末小説から』第69号 2003. 4. 1、1-13頁。『清末小説叢考』2003所収。要旨: 李伯元の死因は肺結核であることは定説になっている。主として友人の証言による。このたび李伯元自身が、光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文を掲載し、みづからが肺病であること、招宴を断わる宣言をしている事実を発見した。新出資料である。李伯元が肺病であったことの確証となるばかりか、『繡像小説』の刊行が遅れていた事実と関連するから、さらに資料的価値が増す。すなわち、李伯元の肺病は、彼の死因となつてると同時に『繡像小説』の恒常的発行遅延の原因だということになるからだ。

『繡像小説』刊行一覧(部分)

光緒	従来	中外日報	申報	新聞報	備考
三十二 丙午 1906	正 67 68	**十五 50	**十五 50 廿九 49-52	**十七 50 廿九 49-52	劉鉄雲日本訪問1回目
	二 69 70	初二 49-52 初六 52	*初六 49-52		初六 遅延広告(中外日報) 十五 李伯元肺病宣言 52 遅延広告
	三 71 72	廿 49-52 廿五 53, 54	*廿四 53, 54 *三十 53, 54	廿五 53, 54	十四 李伯元死去 53文明小史57回、活地獄27回(×李伯元作)
	四				
	閏四		*初九 55, 56		55 文明小史59回、活地獄29回(×李伯元作) 56 文明小史60回、活地獄30回(×李伯元作)
	五				
	六	初二 55, 56 初八 57, 58	初八 57 *十一 57, 58	初三 55, 56 初七57 初九57, 58	57 活地獄31回(×李伯元作) 58 活地獄32回(×李伯元作)
	七	廿二 58, 59	*十三 59, 60	廿二 58, 59	59 醒世縁彈詞12回(×李伯元作) 60 活地獄33回(×李伯元作)
	八	初二 60, 61 廿 62-64	*初一 60, 61 *十九 62-64 *廿八 61-64	初一 60, 61 十九 62-64	劉鉄雲日本訪問2回目 61 活地獄34回(×李伯元作) 63, 64 活地獄35, 36回(×李伯元作)
	九		4*初四 62-64		
	十	廿六 65-67		廿七 65-67	初九 『文明小史』商務印書館単行本 65 活地獄37回(×李伯元作)
	十一		*初五 65-67 *廿九 69	廿九 67-69	十五 吳趸人「李伯元伝」『月月小説』1年3号 68, 69 活地獄38, 39回 醒世縁彈詞13, 14回(×李伯元作)
	十二	初二 69 十八 72	*初八 68-70 *十八 72	十七 72	初一 蔣維喬、談小蓮と相談 70, 71 吳趸人「活地獄」40-42回 十八 改良広告(中外日報) 72 歐陽鉅源「活地獄」43回

青色印 第1年24期 第2年48期 第3年72期の実際の完結刊年

黄色印 注意すべき事項

【参照】注と重複している文献がある

光緒三十三年九月初三日(1907. 10. 9) 付『時報』『中外日報』ほかに、「商務印書館/南亭亭長/繡像小説」という商務印書館自身の広告(劉徳隆の指摘あり)

【編年③1304】『中外日報』光緒三十三年七月初六日(1907. 8. 14)、初八日、十四日、二十五日、八月初一日、九月初三日、初十日、十一日、

十三日、十六日、二十三日。『時報』九月初三日、十三日。『神州日報』七月十三日

文迎霞「關於《繡像小説》の刊行、停刊和編者」『華東師範大學學報(哲學社會科學版)』第38卷第3期2006. 5. 15

陳大康「晚清《新聞報》與小説相關編年(1903-1905)」『明清小説研究』2007年第2、3期(總第84、85期) 2007発行月日不記

陳大康「中国近代小説史料——《繡像小説》中小説史料編年」『文學遺產 網絡版』劉霞によると2010. 4. 5(未確認) 電字版 『新聞報』廣告を主として採録する。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(2014)に吸収された

劉霞「關於《文明小史》の刊行時間」『現代語文』2012年第1期(總第454期) 2012. 1. 5

葉偉平「夏曾佑、張元濟与商務印書館の小説因縁拾遺——《繡像小説》創?前後張元濟致夏曾佑信札八封」『中国現代文學研究叢刊』2014年第1期(總第174期) 2014. 1. 15。引用して四月朔「商務館現求助於繁華報館主人李伯元, 其筆墨亦平淺, 然此外更無人」

文娟「附録4:《申報》所刊雷瑯的謝贈文字」1905. 8. 16(陰曆七月十六日)には「第四十九、五十冊《繡像小説》」とある。送られてきた写真を見ると「第四十九五十冊繡像小説」となっている(2016. 1. 30受参考)。前後左右の資料からたぶん誤植だろうと考える。『文學場域變革中的交融共生——掃葉山房說部及雜誌刊行研究』上海大學出版社2015. 11。275頁

*印 王文君「就《申報》刊《繡像小説》廣告——與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号 2014. 7. 1 王論文により『申報』部分を訂正加筆した。注:「光緒三十三年五月初一日 第4版 第72期」は未記載

**印 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文學出版社2014. 1。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

3*印 劉穎慧『晚清小説廣告研究』北京・人民出版社2014. 9。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

4*印 文娟「附録:近代《申報》小説廣告編年」『結縁与流變——申報館与中国近代小説』桂林・廣西師範大學出版社2009. 3。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

5*印 文娟2016. 1. 30付メール。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

6*印 劉霞「關於《文明小史》の刊行時間」『現代語文』2012年第1期(總第454期) 2012. 1. 5。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した



順慶『古典与現代的交会:海峽兩岸社会与文化學術會議論文集』成都・巴蜀書社 2007. 10 電字版

吳 學平○国内王爾德研究述評 『外国文學研究』 2003年第1期 2003. 2. 25

趙 驥○笑舞台与上海文明戲 『杭州師範大學學報(社會科學版)』2010年第2期 2010. 3

王 建開○藝術与宣伝:莎劇訳介与20世紀前半中国 社会進程 台湾『中外文學』第33卷第11期(總第395期) 2005. 4

黃 愛華上海笑舞台的變遷及演劇活動考論 袁國興 『清末民初新潮演劇研究』廣州・廣東人民出版社2011. 1

—— ○藝術与宣伝:莎劇訳介与20世紀前半中国 社会進程 張衝主編『同時代的莎士比亞: 語境、互文、多種視域』上海・復旦大學出版社2005. 12

—— ○笑舞台与文明新戲後期劇壇 『中国現代文學論叢』第8卷第1期 2013. 8. 1

—— ○笑舞台的崛起及其对文明新戲後期劇壇的 意義 『首都師範大學學報(社會科學版)』 2015年第4期(總第225期) 2015. 8. 25

郝 嵐○林紓与“娛樂化”的莎士比亞 『讀書』 2005年第12期(總第321期) 2005. 12. 1、電 字版

趙 娟茹○李伯元《文明小史》研究的回顧与前瞻 『燕山大學學報(哲學社會科學版)』第16 卷第1期 2015. 3

管 紅宇○《繡像小説》研究 『史志學刊』2006年 第3期 2006

趙 驥○鄭正秋對於莎士比亞演劇之貢獻 『雲南 藝術學院學報』2016年第3期 2016. 9. 25

葉 庄新○從戲曲到新劇的一座橋梁——莎士比亞劇 作在中国傳播的最初語境 『福州大學學報 (哲學社會科學版)』2007年第5期(總第 81期) 2007. 9. 15

瀬戸宏、顧文勳、盛竹雲編校 ○『《申報》掲載文 明戲劇評』好文出版2017. 11. 1

林 慧君○論《文明小史》的語言特色 高柏園、曹

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

『比律賓志士独立伝』の底本 2

沢本郁馬

4 底本『南洋之風雲』

底本『南洋之風雲』には漢文で書かれた「序」がある。末尾に「明治三十四歳次辛丑一月／潮来 宮本平撰」と表示される。著者は宮本平九郎で間違いない。

『志士独立伝』に収録された「序」は、底本とほぼ同文だ。その内容の概要を紹介する。

日本人の宮本から見たアジアの情勢は、欧米の列国が弱小国を圧迫している事実だ。ロシア、ドイツが支那を、イギリスが南アフリカを、アメリカがキューバ、フィリピンに対して取っている態度がそれだ。アメリカに狙われたのがフィリピン(比律賓。漢訳も同じ)である。ポンセは憂国の士でありフィリピンの独立自主の基礎を築こうとしている。日本に流れきて宮本のもとを訪ねた。フィリピンを談じて悲憤慷慨する云々。

語句について修改している小さい部分がある。中国人から見て手を入れたくなった箇所らしい。たとえば底本が「宜如此耶」としたその「此」を改めて「宜如是耶」とするなどだ。

だが、日本語に強く影響を受けた漢訳だと思う。たとえば、国名の表示だ。日本語と漢語では外国名の表示は基本的に異なる。宮本は漢文の中で使用する国名は日本語である。露(ロシ

ア)、独(ドイツ)、支那、北米合衆国(アメリカ)、比律賓(フィリピン)、英(イギリス)、仏(フランス)などである。しかし、呉超は漢訳していない。日本語のままを使用する。

最後部分に削除が少しある。以下に底本から引用しておく。

近者著一書、曰比律賓問題、附以比島志士小伝、其意在説所以比人与米人構難寔出不得已、兼闡明比島事情、以欲煩我邦志士一読焉、邦人通比島事情者極少、或遽断以為蒙昧之民、

底本『南洋之風雲』の全体構成、つまりフィリピンがアメリカと戦わざるをえない理由、またフィリピン事情を明らかにしているという説明だ。ここを削除した理由は、呉超がその本体を翻訳しなかったからである。『志士独立伝』は、附録の「志士列伝」のみを取りあげて漢訳したのである。

ついでだから細かい修改もあげておく。

然觀此書 → 今觀是篇

頗有我邦古武士之風 → 頗有古武士之風
刻成、余因書所感以辨卷首 → 是為序

ここでも「此」を「是」に書き換えている。それくらいのことだ。細部に手を入れたが全体の主旨に変更はない。

5 『南洋之風雲』と『志士独立伝』

底本『南洋之風雲』の目次を以下に紹介する。

潮来宮本平撰「序」(注:漢文。一部分を削除して『志士独立伝』に収録する)

潮来生識「例言」

ドン、マリアーノ、ポンセ Don Mariano Ponce 氏伝
(注:無記名。執筆は宮本平九郎だろう)

比律賓独立軍々歌(其一) フェルナンド、グレーロ氏
作歌 ホセー、デ、シーロス氏作曲

比律賓独立軍々歌(其二) ラーウロ、マタアス氏作歌
セスチーノ、ロドリゲス氏作曲

比律賓独立軍国家記

写真 31葉(注: ポンセ、リサール肖像を含む)

比律賓群島全図

第一章 緒言

第二章 比律賓独立戦争の起因

第三章 ビアック、ナ、パト一条約

第四章 米西戦争の当初に於ける比米両軍の関係

第五章 ガヴィーテ州に於ける比律賓独立軍の奏功及群
島の統一

第六章 米国当局者とアギナルド將軍との秘密会見

第七章 馬尼刺市攻撃前に於ける比国独立軍の状況、比
米両国衝突の端緒

第八章 比律賓群島独立の宣言

第九章 馬尼刺市の包圍攻撃

第十章 馬尼刺市占領後に於ける米軍の暴状

第十一章 マローロス市に於ける比律賓共和国議会の解
説

第十二章 比律賓共和国憲法の概要

第十三章 比律賓共和国憲法

第十四章 比律賓群島領有に関する欧米人の反対意見

附 録: 志士列伝 137-197頁(注: この部分を漢訳)

『志士独立伝』は、宮本の漢文「序」を引用し、日本語の「附録: 志士列伝」のみを漢訳したものだ。もとが附録だから漢訳本文は前述のとおり36頁の小冊子にしかならない。

各伝について題名の日本語原文と漢訳を対照する。

アギナルド將軍伝	圭拿羅陀將軍伝
ドン、マルセーロ、イラーリオ、デル、ピラール氏伝	皮辣符路氏伝
ドン、ホセー、リサール氏伝	利利乎羅氏伝(辞 世詩「臨終之感想」あり)
ガリカーノ、アパシブレ博士伝	愷古維培博士伝
イシドーロ、デ、サントス博士伝	奚路尋司博士伝
フェリーペ、アゴンシリヨ氏伝	華配昂喬氏伝

マルセリーノ、デ、サントス氏伝	苗待新司氏伝
アントニオ、ルーナ將軍伝	都元羅那將軍伝
グレゴリーオ、デル、ピラール將軍伝	浩託包羅將軍伝
パンタレオン、ガルシア將軍伝	平台槐佳將軍伝
トマス、マスカルド將軍伝	培非卡託將軍伝
ピオ、デル、ピラール將軍伝	飄羅蒲路將軍伝
イシドー、トルレス將軍伝	奚路土司將軍伝
ルシアーノ、サン、ミゲール將軍伝	路曉生華將軍伝
テオフィーロ、デルガード將軍伝	調牢理古將軍伝
ホセー、パウア將軍伝	化消蒲阿將軍伝
サンチアーゴ、バルセローナ博士伝	新浩飄拿博士伝
ラモン、アバルカ氏伝	辣蒙阿耶氏伝
アントニーノ、ヴェルヘル博士伝	道豪華富博士伝
ホセー、マリア、バーサ氏伝	喬那派利氏伝
イサベロー、デ、ロス、レイエス氏伝	奕薄斯先氏伝
テオドーロ、サンヂーゴ氏伝	調討生喬氏伝
エミルアーノ、リエゴ、デ、ヂオス將軍伝	妙料廉岳將軍伝
名士追録 (省略しており漢訳なし)	

6 崇昭本西の謎——孫文、日本人お清との関係

原作者マリアノ・ポンセの名前が漢訳されて崇昭本西となるのはなぜか。

まず本西から説明する。

漢字にするばあい一般には馬里亜諾・蓬塞、または彭西、棒時などと表記される。そちらのほうが Ponce の音に近い。本西を北京語 Benxi で発音するとポンセからすこし遠ざかる。わざわざ本西にした理由があるはずだ。

その解答は宮崎滔天『三十三年の夢』*6のなかにあると考える。

関連箇所を引用する(ルビ省略)。冒頭行に名前を抜き出し [] 内に林啓彦改訳『三十三年之夢』(1981)*7の該当する箇所を参考のために示す。滔天自身がフィリピン人ポンセとの出会いを証言している。

『三十三年之夢』187-188頁 ○○○君=ポンセ君 [128

頁 ×××先生=彭西先生]

余(注:宮崎滔天)や志支那大陸に存するものなり、しかして香港に至りて菲島の人士と交結す、みづから顧みて、また多情に過ぎるを感じずんばならず。しかれども、余はこれを抑制すること能わざりき。否、あえて抑制することなくして、その情に従えり。そのはじめて〇〇〇君(のちに菲国独立軍の外務総長)と相い見るや、彼、慷慨禁ざる能わざるもの如く、テーブルを拍いていっていわく

人はその信頼するところのものに欺かるるより、はがゆきはなし。我が国の現状、実にしかり。君知らずや、さきに米国のスペインと鬭を生ずるや、我らをして内応せしめて、事平ぐに至らば自主独立を許すを誓う。我らはその言を信じて、命を賭して戦えり、自主独立を希うが故なり。しかしてスペインは敗走せり、皆おもえらく、自主独立の民たるを得ん、と。いづくぞ知らん、米国のために隷属を強いられんとは。ああ、われらまさに何をなすべきか。自由のためにスペインと戦いしわれらは、今また自由のために米国と戦わざるべからざるなり。しかり、ただ戦争の一法あるのみ。亞州俟国の友よ、卿らまさに、如何んかわれらの心事を憐まんとするぞ

と。情やすでに悲し、その言豈に多く聞くに忍びんや。

以上長く引用したのは、フィリピン独立軍の「〇〇〇」がすなわちポンセであるからだ。

『南洋之風雲』で宮本「序」がポンセについて「フィリピンを談じて悲憤慷慨する云々」と書いていた。その内容は、滔天の記述を見れば推測できる。

「鬭を生ずる」とは、いざこざ、不和が生じるという意味。ここでは米西戦争をいう。

ポンセが自ら語ったフィリピン、スペイン、アメリカの関係とその推移について、滔天は上のように記録した。

スペインの支配下にあったフィリピンでは独立運動が起こっていた。独立派内部での分裂も

ありアギナルド將軍はスペイン殖民地当局と媾和条約(ビヤック・ナ・バトー条約)を結び武器引き渡しの代償を受けて香港に亡命する。1897年のことだった。香港においてフィリピン委員会を組織し会長はアギナルド、書記長はボンセ(1896年、滞在していたスペインのマドリドより香港到着)が選ばれた。委員会の主たる活動は革命政府のために武器弾薬を調達することだ。

1898年8月(『南洋之風雲』5頁。一説に6月29日、7月7日)、ボンセはフィリピン独立軍代表者として日本に派遣され横浜に潜伏した。その目的は調査および日本政府にフィリピン独立の支援を求めることだ。具体的にいえば、武器弾薬の調達である。しかし、日本はアメリカとの協調を主とし局外中立を発表する。そのためボンセの対日本政府工作は不首尾であった。

アメリカはアギナルドにフィリピン独立を約束してスペイン軍を襲わせた。スペイン降伏後、アメリカは約束を反故にしアギナルドら独立軍の掃討を開始した。1899年、フィリピンとアメリカの戦争(比米戦争)がはじまった。ボンセの活動は急がされることになる。

青木周蔵外務大臣にあてた大浦兼武警視總監の1899年5月31日付報告書がある(句点は筆者。以下同じ)*8。

馬尼刺叛徒ノ派遣員ハ本邦ヨリ兵器ノ供給ヲ得ント熱望セルコト久シク從テ種々ノ手段ヲ運ラシ以テ其目的ヲ達セントセリ。現ニ去ル三十年四月中窃カニ横浜碇泊中ノ米国帆船「ガージニヤ」号噸數千三百八噸竝ニ同市居留地七十七番館「イートンブラツト」商会ノ倉庫ニアル元込銃二百挺「ゲベール」銃三千五百挺ヲ購入シテ馬尼刺ニ輸送セント試ミ又大阪ニ於テモ外商ノ手ヨリ村田銃ヲ買入レントシタル聞ヘアリシカ昨年十月ニ至リ叛徒ノ大統領「アギナルト」ノ秘書官「ボンセ」ハ麴町区飯田町二丁目五十三番地写真師鈴木真一ニ銃器ノ周旋方ヲ依頼シ鈴木ハ故川上大将ノ眷顧ヲ受ケ居ルヨリ大将ハ陸軍大臣及福島大佐ニ謀リ遂ニ「モーゼル」「スナイド

ル」ノ両銃ヲ合セテ六万挺ヲ拵下クルコトニ決シタルニ同年十二月下旬ニ及ヒ日本政府ハ米國政府ヨリ叛徒ニ関スル照會ニ接シ為メニ右銃器ハ断然拵下ケサルコトニナリタレハ「ボンセ」ハ勿論鈴木モ頗ル落胆シ引続キ川上大将福島大佐ニ迫リシモ容易ニ許サルヘキ見込ナキヨリ鈴木ハ「ボンセ」ヲ故勝伯ニ紹介シ同伯ノ手ヲ経テ再ヒ川上桂ノ兩大将ニ運動シタル結果「モーゼル」銃百四十挺「スナイドル」銃八十挺ヲ拵下クルコトトナリシモ是亦不調トナリシ。「ボンセ」ハ断念セス其後モ福島大佐ニ迫ル所アリシモ其目的ヲ遂クルニ至ラス。依テ其方法ヲ転シ鈴木ト懇意ナル飯田町五丁目三十五番地居住区會議員東村守節カ元陸軍ニ奉職シタルコトアル者ナルヨリ同人ニ買入方ノ相談ヲ為シタルニ容易ニ承諾シ古銅銃商ヨリ見本トシテ三種ノ銃器ヲ持帰り「ボンセ」ニ示シタルニ銃一挺ニ弾藥百發ヲ付シ金八円ト云フヲ五円ニ値切リタルヨリ破談トナリ続テ十字信介ヨリ六種ノ銃器ヲ取寄セタルモ價格相談纏ラス其後或ル学校ノ名義ヲ以テ陸軍省ヨリ拵下ケント試ミタルモ一校二十挺ニ限りニシテ且ツ廢銃ニシテ用ヲ辨セス。此ニ於テ「ボンセ」モ止ムナク獵銃ヲ買入ルハニ決シタルモ其輸送方ニ困却シ鈴木真一所有ノ汽船住吉丸噸數千四百四十八噸ヲ馬尼刺迄一航海七八万円位ニテ借入レタシト相談セシモ鈴木ハ二十万円ニアラサレハ逆之ニ応セス。是レ「ボンセ」カ横浜ナル上海銀行ニ多額ノ預金アルヲ知ルニ因レリ。是ニ於テ「ボンセ」ハ鈴木ト手ヲ絶チ今回ハ山縣五十雄(王朝報英文記者)ノ手ニテ兵器ヲ得ント奔走セシモ目的ヲ達スル能ハス。結局去月下旬香港在留銃器商米人某ヨリ多数ノ兵器ヲ買入レ同港ヨリ独逸船ニ搭載シ馬尼刺ニ送致スルニ至リシモノナリト云フ

上の報告書は、アメリカ公使にあてた文書の「附記」である。細かな数字まで明らかにしてボンセらの武器弾薬調達に関する活動を報告している。ボンセの工作は、多くが失敗に終わった。日本政府によってその実状は逐一把握されていたことがわかる。

それよりも以前に梅屋庄吉は香港で「梅屋照相館」という写真館を開いていた。孫文に紹介

されボンセにも会っている。梅屋は、中国革命派、フィリピン独立派に対して資金を支援する存在だった。

1899年、横浜において滔天、平山周、孫文、ボンセらが顔を会わせた。「孫文、対陽館に来訪、Mariano Ponce (マリアノ・ボンセ)の要請をうけフィリピン独立軍のための武器調達を依頼。三月、横浜外国人居留地一ニ一番館の孫文寓居で平山(周)とともにボンセに紹介さる」(「滔天年譜稿」『三十三年之夢』462-463頁)

ボンセは、孫文、梅屋、滔天、平山ら民間の人脈をたぐって武器弾薬を購入しようとした。

衆議院議員中村弥六が登場する。号は背山、背水。儒学者の家に生まれ、教師を経て内務省に入りドイツに留学したことがある。衆議院議員に当選したあと、ボンセの依頼を受け武器払い下げの運動に尽力した。その弾薬は布引丸に積まれ日本からフィリピンにむけて輸送された。ところが運悪く沈没(1899. 7. 21布引丸事件)したことによりフィリピンには届かなかった。☒

【注】

- 6) 宮崎滔天著、島田虔次、近藤秀樹校注『三十三年の夢』岩波文庫青122-1、1993. 5. 17/参照：白浪庵滔天(宮崎寅藏)『三十三年の夢』国光書房1902. 8. 21(扉は白浪庵滔天『三十三年の夢』) 国立国会図書館デジタルコレクション
- 7) (日) 宮崎滔天著、佚名初訳、林啓彦改訳、注釈『三十三年之夢』広東・花城出版社、生活・読書・新知三聯書店聯合出版1981. 8
- 8) 「事項三一 布引丸一件 五六二」『日本外交文書』879-880頁 国立国会図書館デジタルコレクション

文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告

神田 一三

結論を先にいう。存在を否定せざるをえないという結末である。早急すぎるというのであれば、問題を解決するにはもう少し時間がかかるといってもいい。ある新聞広告が問題だ。そこから文章を引用した中国人研究者に対して、本当に見たのかと疑問を提出することになる。

説明する。

文明戯「ハムレット [竊国賊]」の上海初演はいつなのか*1。年月日を特定したい。これが課題だ。

文明戯の初演を確かめるためには、発行年月日を記載した新聞が資料になる。『申報』に掲載された文明戯「竊国賊」の上演広告が使われる理由だ。

瀬戸博士は該紙1916年5月7日付広告を発見した。それに先行する広告は示さない。普通に考えて、その5月7日が初演ということになる。その広告から文章を引用して瀬戸博士が説明している。これから上演するという予告だ。瀬戸博士の紹介を読んだ人は5月7日に初演された動かぬ証拠だと考えるだろう。

しかし、5月7日(旧曆四月初六日)の該当広告を見れば疑惑が生じる。そこに書かれた内容は、以前に上演したことを説明しているからだ。なぜそのような違いがあるのか。

新聞広告には次の部分がある。だが、瀬戸博

士は意図的に無視して紹介しなかった。その箇所は以下のとおり。

新劇が始まって以来、これほど価値があり、これほどうまく演じられ、人気を博したすばらしい芝居はいままでであったことがない

自有新戯以来 従未有過如此有価値 如此演得好 受歡迎之好戯也

注目点は、次の語句だ。「これほどうまく演じられ、人気を博したすばらしい芝居 [如此演得好 受歡迎之好戯]」は役者と観客の様子を述べている。ここを見ればすでに上演されていることが明らかだ。さらに、「いまであったことがない [従未有過]」という字句につながっている。すでに公演された事実を強固なものにする。「新劇が始まって以来 [自有新戯以来]」のすばらしい芝居だという。自讃を含んでいるにしても好評だった。

瀬戸博士の説明によれば広告掲載の当日が初演でなくてはならない。だが、広告文面は瀬戸博士の説明を否定する。「竊国賊」は5月7日に上演されたが初演ではない。

新聞広告は過去の上演について述べている。初演はさらにさかのぼると推測することができる。だが瀬戸博士の読解によるとこれから上演される未来のことに変容する。過去と未来の区別がついていない。どうしてそうなるのか。

一見不可解な記述だ。しかし、瀬戸博士の文章を読んだことがある人なら理解するだろう。もともと思考方法がそうなっている。先に結論を下すという例のやり方だ。

5月7日を初演日だとまず断定する。その結論になるように実在する広告文を脳内で改変しながら読む。自説に都合な部分だけを抽出し、都合の悪い事実は無視破棄する。その結果、上に見るように過去を未来にすり替えた。瀬戸博士が常用する荒唐技術だ。瀬戸博士にしてみれ

ば日常のことであって奇妙とは思わないのだから。

影印本で調べると『申報』の1916年4月27日(陰曆三月廿五日)および翌日の4月28日(陰曆三月廿六日)に「竊国賊」上演予告の広告が掲載されている。瀬戸博士が指摘した5月7日ではない。それ以前の4月28日に上演されている。この事実を新聞によって確認することができる。「竊国賊」の初演は5月7日ではなく4月28日である可能性が高い。

「可能性」と言うのは、さらにさかのぼる1916年3月11日付『民国日報』の広告を紹介する文章があるからだ。これが本稿の問題である。

そういうのは次のふたりだ。あとで見つけたもうひとりの論文1本を追加する。さらにそれらの源泉となった書籍を最後に紹介する。

郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」(2005)^{*2}および張治『中西因縁』(2012)^{*3}である。両者ともに広告文の一部を引用する。引用しているから実物で確認したと思う。重要なことがある。広告に上演日時を明記しているのか。これへの言及はない。

もし3月11日付『民国日報』に上演日時の記載があれば、『申報』広告の4月28日上演よりも早まる。実際の上演は3月なのか、あるいは4月なのか。私が興味を持つ理由だ。

3月であろうと4月であろうと重要な問題ではない、という人が必ず出てくる。いつものことだ。重要な問題でなければ、そういうその人が簡単に指摘してくれないか。自分でできないことをいちいち批判してどうするのだろうか。批判をするためにだけ批判をしている。

さて、郝嵐と張治は広告の一部を引用している。3月11日という日付と文章を掲げている。くり返すが実物で確認していなければ書くことができない。普通はそう考える。

『申報』掲載の笑舞台「竊国賊」広告がある。前述のとおり1916年4月27日(陰曆三月廿五日)、同年4月28日(陰曆三月廿六日)に連続



『申報』1916. 4. 28

して掲載された。それらを根拠にして「竊国賊」初演は1916年4月28日(陰曆三月廿六日)であると推測している。

今問題にしている広告本文のみを『申報』から原文のままに再度引用する。新聞広告では句読点は使用せず1字空きで表している。黄色で示した部分については後述する。

為人臣而竊君竊国 私通君后 為人弟而盜嫂盜政權 強人子認賊作父 此其人為何如人 此其事為何如事 此其時為何如時 此其勢為何如勢 認賊作父 戴賊為君 此其恥為何如恥 父仇不共戴天 而母且夫事乎 殺父之仇 不得已裝瘋做戲 以動娘心 到頭来大家難逃一死 此其慘為何如慘 以其人其事其時其勢其恥其慘 一一演之于舞台之上 則其戲為何如戲 明眼人于此 其亦来洒一掬傷心淚乎

シェイクスピア原作『ハムレット』のあらすじを述べている。最後には関係者全員が死亡するところまで書く。観客は涙を流すだろうと予測までする。広告だからありうる。今夜シェイクスピア原作の『ハムレット』を上海で上演するという予告だ。孟憲強らが書いている『マクベス』ではないことにご注意いただきたい。

ただし、文明戯はシェイクスピア原作といいながら莎劇そのものではない。よく知られている。林訳『吟辺燕語』所収の「鬼詔」の筋書きを借りて鄭正秋が台詞を創作した。これが文明戯「竊国賊」だ。

郝嵐は1916年3月11日付『民国日報』に「竊国賊」の広告があると指摘する。さらにそこから引用するのだ。『申報』と『民国日報』という異なる新聞でありながら、文面を見る限り広告文は一致している。広告主が同じなら媒体が異なっても同文であることは不思議ではない。

しかし、郝嵐が示したのは広告の全文ではない。上記の黄色部分は省略している。しかも省略したことを説明しない。あたかも一文でつながっているような引用のしかただ。「動」1字を写し忘れている。正確な引用になっていないのは残念なことだ。

また、張治が引用しているのは冒頭部分のみ。「為人臣而竊君竊国，私通君后，為人弟而盜嫂盜政權」は、郝嵐の引用と最初部分が一致する。

『民国日報』に掲載されたという以上の引用は、『申報』の広告文と同一である。同じ広告を別の新聞に使いまわすことはあっただろう。

本稿ではさらに王建開「藝術与宣伝」(2005)⁴⁾を加える。

王建開も177頁の欄外注に『民国日報』1916年3月11日から「竊国賊」の宣伝文を引用している。ところが、これが省略部分までも郝嵐が示したものとまったく一致するという不可思議さだ。初出の刊行年月を見れば王建開の方が郝嵐よりも公表が早い。郝嵐が王建開を引用したのだろうか。省略箇所まで同じになるのだからそうとしか考えられない。『民国日報』1916. 3. 11

結局のところ、ここで問題が生じる。王建開、郝嵐、張治の三人が見た、あるいは示している1916年3月11日(陰暦二月初八日)付『民国日報』だ。

該紙該号を写真で見てもその広告が存在しない。

新聞では芝居関係の広告はまとめて掲載されるのが当時の習慣だ。天蟾舞台、群仙茶園、大舞台、民興社、丹桂第一台、新舞台が広告を出稿している。だがどこにも演目の「竊国賊」はない。引用している広告文が、ない。あるはずのものがないから奇妙だと思う。

過去の経験から「1916年3月11日」は旧暦ではないかという推測が生じる。新暦旧暦混用は『申報』で実例を見た。そこで『民国日報』1916年4月13日(陰暦三月十一日)の複写を入手した。次のものだ。



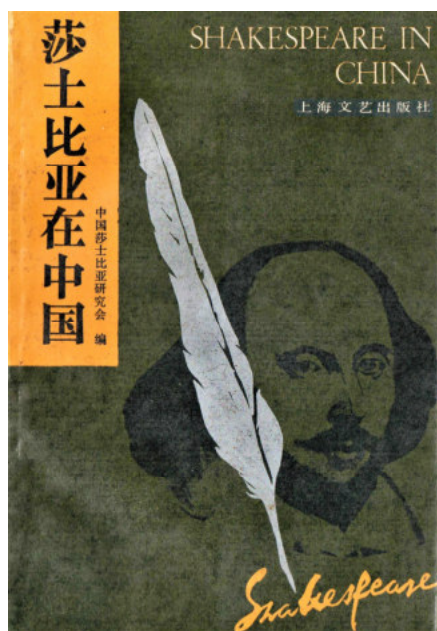
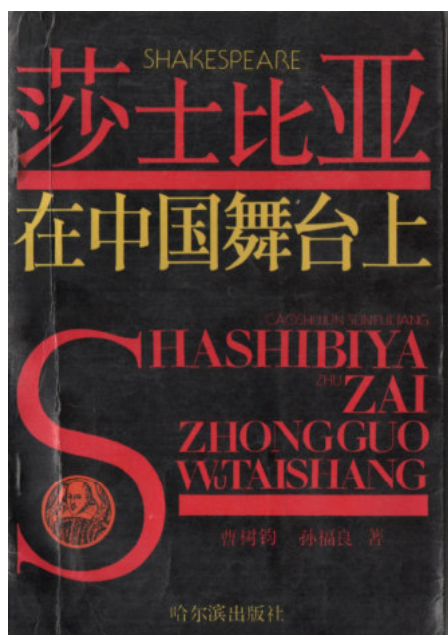
『民国日報』1916. 4. 13 (陰暦三月十一日)

丹桂第一台、群仙茶園、天蟾舞台、新舞台、民興社の広告が重なる。大舞台は広告を出さなかった。ここにも「竊国賊」の広告は見えない。

王建開、郝嵐、張治の三人が引用している新聞広告が存在しない。どこにある文章なのだろうか。奇妙で納得のいかない結末という理由だ。

郝嵐に問い合わせた。しばらくして返答があり『申報』1916年4月28日の広告が添付されている。それは知っている。肝心の『民国日報』





については説明がなかった。

私が調べた結果によると『民国日報』の広告は怪しい。3月11日付広告の存在については大きな疑問符をつけざるをえない。

古書で購入した1本を紹介する。曹樹鈞、孫福良『莎士比亚在中国舞台上』(1989)^{*5}である。

興味深い。おおよその内容はつぎのとおり。

内容提要、張君川「序」、第1章 莎士比亚与中国的戲劇創作、第2章 莎士比亚在中国舞台上(上)など、また「附録」1、莎士比亚戲劇在中国舞台上演出紀事(1902-1989)がある。

なにが「興味深い」といえば、文明戯「竊国賊(ハムレット)」の『民国日報』1916年3月11日上演広告から文章を引用していることだ。その引用文はすでに紹介した王建開、郝嵐らと同文である。なるほど『莎士比亚在中国舞台上』が誤りの源泉かと思った。ところがその先があるのには驚いた。

曹樹鈞と孫福良が連名で公表した論文(『民国日報』に言及なし)が中国莎士比亚研究会編『莎士比亚在中国』(1987)^{*6}に収録されている。該書には汪義群「莎劇演出在我国戲劇舞台上的變遷」が見える。

この汪義群論文93頁にそのまま「竊国賊」の

広告が引用されており「見1916年3月11日《民国日報》」(103頁)とあるのだ。曹孫論文と汪論文は同じ書籍に収録されていることにご注目いただきたい。

曹樹鈞と孫福良のふたりは汪義群論文を読んでいるはずだ。彼らふたりの引用は汪義群論文にもとづくと考えていだろう。

発表時間を見るかぎり『民国日報』についての言及は次の順序になる。汪義群→曹樹鈞と孫福良→王建開→郝嵐→張治だ。順番に引用していったということではないだろう。汪義群論文が最初にあつてそれをのちの全員が写したのではなかろうか。典拠を明示していないから推測するだけ。

まとめる。

1916年3月11日付『民国日報』に「竊国賊」の広告があると最初に指摘したのは汪義群である。それを曹樹鈞と孫福良、王建開、郝嵐、張治らは各人で現物を確認せず書き写した。文章の一部分を省略した箇所まで一致しているという不思議さだ(張治は冒頭部分のみ)。

残る問題は汪義群が提示した『民国日報』1916年3月11日の広告だ。すでに実物写真で確かめたように当日該紙に「竊国賊」の広告はな

い。ありもしない広告を汪義群はどこで見たの
 だろうか。不可解だといわざるをえない。問題
 を解決するにはもう少し時間が必要だ。 四

【注】

- 1) 樽本「文明戯「ハムレット」について——「鬼詔」と「竊国賊」『清末小説から』第127号 2017. 10. 1
- 2) 郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」『読書』2005年第12期(総第321期) 2005. 12. 1、電字版。同「林訳与“林訳小説”」陳錦谷編輯『林紓研究資料選編』上冊 福建省文史研究館編2008. 6所収。これは2009年1月8日付ウェブサイト「豆瓣読書」のfeimo(郝嵐)「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」と同文。また、郝嵐「莎士比亚在1916年前的中国」『清末小説から』第91号 2008. 10. 1においても同じ広告文を引用する。
- 3) 張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012. 8。192-193頁
- 4) 王建開「藝術与宣伝：莎劇訳介与20世紀前半中国社会進程」台湾『中外文学』第33卷第11期(総第395期) 2005. 4。37頁／張衝主編『同時代的莎士比亚：語境、互文、多種視域』上海・復旦大学出版社2005. 12所収。177頁
- 5) 曹樹鈞、孫福良『莎士比亚在中国舞台上』哈爾濱出版社1989. 4. 6)
- 6) 中国莎士比亚研究会編『莎士比亚在中国』上海文藝出版社1987. 12

清末小説から

- 竹越孝編○太田辰夫文庫目録(漢籍の部・複写の部)
 『中国語研究』第58号 白帝社2016. 10. 8
- 崔 文東○翻訳、国族、性別——晚清女作家湯紅絨
 翻訳小説的文化訳写 『中国文哲研究集刊』第50期 2017. 3 電字版
- 樂 偉平○夏曾佑与嚴訖名著出版之關係——以張元
 濟、嚴復致夏曾佑信札为中心 上海図書館
 編『上海図書館藏張元濟文献及研究』上海
 古籍出版社2017. 10

- 鄒 振環○『20世紀中国翻譯史学史』上海世紀出版
 集團、中西書局2017. 10
- 文 娟○『文学場域変革中的交融共生——掃葉山
 房説部及雑誌刊行研究』上海大学出版社
 2015. 12 (実際の刊行は2017. 12)
- 范軍主編○『崇文書局及晚清官書局研究論集』武
 漢・長江出版伝播、崇文書局2017. 12
- 松田郁子○『吳趸人小論——“譴責”を超えて』汲
 古書院2017. 12. 12
- 宋莉華著、鈴木陽一監訳、青木萌訳 ○『宣教師漢
 文小説の研究』東方書店2017. 12. 20
- 武田雅哉○『中国飛翔文学誌——空を飛びたかった
 綺麗な人たちにまつわる十五の夜嘯』人文
 書院2017. 12. 20
- 李 直飛○『中国現代文学転型的政治経済学維度：
 以《小説月報》上の広告为中心』北京・中
 国社会科学出版社2018. 1 聯大学術文庫
- 姜 栄剛○従《儒林外史》伝播接受看近代小説的演
 変 『文学遺産』2018年第1期 2018. 1. 15

『出版史料』2017年第2輯(新総第58期)

2017. 12

- 張元濟与陸費達：商務和中華教科書の較量…姚 一鳴
 《書里書外——張元濟与近代中国出版》序二則
 ……張人鳳、柳和城
 《商務印書館史料選編(1897-1950)》前言及後記
 ……汪 耀華

蘇子敬主編『第四屆 中国小説戲曲國際學術研討會論
 文集』

台湾・里仁書局2013. 3. 20

- 新加坡文言小説鳥瞰：1907-1911 ……辜 美高
 王韜小説的新事及其先驅意義 ……王 晋光
 黄翠凝：清末民初職業女小説家 ……黄 錦珠

『明清小説研究』2017年第4期(総第126期)

2017. 10. 15

- 従《鉄雲詩存》看劉鶚人生“三遊”及詩歌“太谷化”
 ……伏 濤
 吳趸人言情小説的女性書写闡析——兼論其对傳統小
 説女性書写的革新 ……金 瓊